

IV 義務教育9年間のよりよい 外国語教育のために

◆◇ 小学校学習指導要領（平成20年3月告示）第4章 外国語活動（全文） ◇◆

第1 目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

第2 内容

〔第5学年及び第6学年〕

- 1 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。
 - (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
 - (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
 - (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
- 2 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。
 - (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
 - (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
 - (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- 1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。
 - (1) 外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること。
 - (2) 各学校においては、児童や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、2学年間を通して外国語活動の目標の実現を図るようにすること。
 - (3) 第2の内容のうち、主として言語や文化に関する2の内容の指導については、主としてコミュニケーションに関する1の内容との関連を図るようにすること。その際、言語や文化については体験的な理解を図ることとし、指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないようにすること。
 - (4) 指導内容や活動については、児童の興味・関心にあつたものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。
 - (5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。
 - (6) 音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活用すること。その際、使用する視聴覚教材は、児童、学校及び地域の実態を考慮して適切なものとする。
 - (7) 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、外国語活動の特質に応じて適切な指導をすること。
- 2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。
 - (1) 2学年間を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。
 - ア 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。
 - イ 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。



- ウ 言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること。
- エ 外国語活動を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めることができるようにすること。
- オ 外国語でのコミュニケーションを体験させるに当たり、主として次に示すようなコミュニケーションの場面やコミュニケーションの働きを取り上げるようにすること。

[コミュニケーションの場面の例]

(ア) 特有の表現がよく使われる場面

- ・ あいさつ ・ 自己紹介 ・ 買物
- ・ 食事 ・ 道案内など

(イ) 児童の身近な暮らしにかかわる場面

- ・ 家庭での生活 ・ 学校での学習や活動
- ・ 地域の行事 ・ 子どもの遊びなど

[コミュニケーションの働きの例]

(ア) 相手との関係を円滑にする

(イ) 気持ちを伝える

(ウ) 事実を伝える

(エ) 考えや意図を伝える

(オ) 相手の行動を促す

(2) 児童の学習段階を考慮して各学年の指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。

ア 第5学年における活動

外国語を初めて学習することに配慮し、児童に身近で基本的な表現を使いながら、外国語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活にかかわる活動を中心に、友達とのかかわりを大切にした体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。

イ 第6学年における活動

第5学年の学習を基礎として、友達とのかかわりを大切にしなが、児童の日常生活や学校生活に加え、国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。

I	小中一貫教育 理論編
II	外国語教育 理論編
III	外国語教育 実践編 全体・系統
III	外国語教育 実践編 小学校
III	外国語教育 実践編 接続・導入
III	外国語教育 実践編 中学校
IV	資料編

◆◇ 中学校学習指導要領（平成20年3月告示）第2章9節 外国語科（全文） ◇◆

第1 目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

第2 各言語の目標及び内容等

英語

1 目標

- (1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

2 内容

(1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現できる実践的な運用能力を養うため、次の言語活動を3学年間を通して行わせる。

ア 聞くこと

主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。
- (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を正確に聞き取ること。
- (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
- (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。
- (オ) まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。

イ 話すこと

主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。
- (イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。
- (エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。
- (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

ウ 読むこと

主として次の事項について指導する。

- (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。
- (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。
- (ウ) 物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。
- (エ) 伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。
- (オ) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。

エ 書くこと

主として次の事項について指導する。

- (ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
- (イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
- (エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
- (オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。



(2) 言語活動の取扱い

ア 3 学年間を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。

- (ア) 実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようにすること。
- (イ) 実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。
- (ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。

〔言語の使用場面の例〕

- a 特有の表現がよく使われる場面
 - ・ あいさつ ・ 自己紹介 ・ 電話での応答
 - ・ 買物 ・ 道案内 ・ 旅行
 - ・ 食事 など
- b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面
 - ・ 家庭での生活 ・ 学校での学習や活動
 - ・ 地域の行事 など

〔言語の働きの例〕

- a コミュニケーションを円滑にする
 - ・ 呼び掛ける ・ 相づちをうつ ・ 聞き直す
 - ・ 繰り返す など
- b 気持ちを伝える
 - ・ 礼を言う ・ 苦情を言う ・ 褒める
 - ・ 謝る など
- c 情報を伝える
 - ・ 説明する ・ 報告する ・ 発表する
 - ・ 描写する など
- d 考えや意図を伝える
 - ・ 申し出る ・ 約束する ・ 意見を言う
 - ・ 賛成する ・ 反対する ・ 承諾する
 - ・ 断る など
- e 相手の行動を促す
 - ・ 質問する ・ 依頼する ・ 招待する など

イ 生徒の学習段階を考慮して各学年の指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。

- (ア) 第1 学年における言語活動

小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。
- (イ) 第2 学年における言語活動

第1 学年の学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを更に広げた言語活動を行わせること。その際、第1 学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに、事実関係を伝えたり、物事について判断したりした内容などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。
- (ウ) 第3 学年における言語活動

第2 学年までの学習を基礎として、言語の使用場面や言語の働きを一層広げた言語活動を行わせること。その際、第1 学年及び第2 学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに、様々な考えや意見などの中からコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。

I	小中一貫教育 理論編
II	外国語教育 理論編
III	外国語教育 実践編 全体・系統
III	外国語教育 実践編 小学校
III	外国語教育 実践編 接続・導入
III	外国語教育 実践編 中学校
IV	資料編

(3) 言語材料

(1)の言語活動は、以下に示す言語材料の中から、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。

ア 音声

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音変化
- (ウ) 語、句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

イ 文字及び符号

- (ア) アルファベットの活字体の大文字及び小文字
- (イ) 終止符、疑問符、コンマ、引用符、感嘆符など基本的な符号

ウ 語、連語及び慣用表現

- (ア) 1200語程度の語
- (イ) in front of、a lot of、get up、look for などの連語
- (ウ) excuse me、I see、I'm sorry、thank you、you're welcome、for example などの慣用表現

エ 文法事項

- (ア) 文
 - a 単文、重文及び複文
 - b 肯定及び否定の平叙文
 - c 肯定及び否定の命令文
 - d 疑問文のうち、動詞で始まるもの、助動詞 (can、do、may など) で始まるもの、or を含むもの及び疑問詞 (how、what、when、where、which、who、whose、why) で始まるもの

(イ) 文構造

- a [主語＋動詞]
- b [主語＋動詞＋補語] のうち、

(a) 主語＋ be 動詞＋	{	名詞	}
		代名詞	
		形容詞	
- (b) 主語＋ be 動詞以外の動詞＋

	{	名詞	}
		形容詞	

- c [主語＋動詞＋目的語] のうち、

(a) 主語＋動詞＋	{	名詞	}
		代名詞	
		動名詞	
		to 不定詞	
		how (など) to 不定詞	
		that で始まる節	
- (b) 主語＋動詞＋ what などで始まる節



d [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]のうち、

(a) 主語+動詞+間接目的語+
名詞
代名詞

(b) 主語+動詞+間接目的語+ how（など）to 不定詞

e [主語+動詞+目的語+補語]のうち、

(a) 主語+動詞+目的語+
名詞
形容詞

f その他

(a) There + be 動詞+～

(b) It + be 動詞+～ (+ for ～) + to 不定詞

(c) 主語+ tell, want など+目的語+ to 不定詞

(ウ) 代名詞

a 人称、指示、疑問、数量を表すもの

b 関係代名詞のうち、主格の that、which、who 及び目的格の that、which の制限的用法

(エ) 動詞の時制など

現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形及び助動詞などを用いた未来表現

(オ) 形容詞及び副詞の比較変化

(カ) to 不定詞

(キ) 動名詞

(ク) 現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法

(ケ) 受け身

(4) 言語材料の取扱い

ア 発音と綴りとを関連付けて指導すること。

イ 文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。

ウ (3)のエの文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるように指導すること。また、語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。

エ 英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること。

3 指導計画の作成と内容の取扱い

(1) 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ア 各学校においては、生徒や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3 学年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること。

イ 2の(3)の言語材料については、学習段階に応じて平易なものから難しいものへと段階的に指導すること。

ウ 音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して2の(3)のアに示された言語材料を継続して指導すること。

また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。

エ 文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること。

オ 語、連語及び慣用表現については、運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにすること。

カ 辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

キ 生徒の実態や教材の内容などに応じて、コンピュータや情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用したり、ネイティブ・スピーカーなどの協力を得たりなどすること。

また、ペアワーク、グループワークなどの学習形態を適宜工夫すること。

- (2) 教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

その他の外国語

その他の外国語については、英語の目標及び内容等に準じて行うものとする。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- 1 小学校における外国語活動との関連に留意して、指導計画を適切に作成するものとする。
- 2 外国語科においては、英語を履修させることを原則とする。
- 3 第1章総則の第1の2及び第3章道德の第1に示す道德教育の目標に基づき、道德の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道德の第2に示す内容について、外国語科の特質に応じて適切な指導をすること。

◆◇ 放課後等の教育支援の在り方（文部科学省、平成 26 年 3 月 19 日） ◇◇

今後、多様な教育人材と協働した教育活動は、多様で一貫性のある外国語教育のみならず、(義務)教育のより一層の質的充実を図るために、必要不可欠であると言えます。杉並区においても、平成 26 年度教育課程より、「共に学び共に支え共に創る教育」の実現、「各学校の課題の解決」のために、月1~2回程度の土曜授業を、「かかわり」と「つながり」を重視した教育を展開すること等としています。

以下には、中央教育審議会生涯学習分科会のワーキンググループが取りまとめた、放課後等の教育支援の在り方に関する資料(ポイント)、参考資料(一部)を掲載します。

～土曜日の豊かな教育環境の実現に向けて～ 今後の放課後等の教育支援の在り方に関するワーキンググループ中間取りまとめ(ポイント)

◆社会の動向と放課後・土曜日等の教育活動への期待

- 社会の動向：少子高齢化の進展、グローバル化、科学技術の進歩、地域間格差・経済的格差の進行
 - 子供たちの教育環境をめぐる現状：核家族化、一人親世帯、共働き世帯の増加、地域のつながりの希薄化、学校の小規模化、不登校児童生徒や特別な支援が必要な児童生徒の増加等
- ⇒ 今後の多様で変化の激しい社会を生き抜くために必要な力の育成に向け、**社会総括かりで土曜日等の豊かな教育環境の実現を目指す**

放課後や土曜日への期待

～子供と関わる人材の多様性や学習集団、学習時間、実施場所等の多様性・柔軟性を活かした創意工夫に富んだ教育活動の実践～

- ① 学校での学びが深まり、広がる学習、体験の機会の充実
- ② 安心して度み育てられる環境づくりとしての放課後・土曜日の教育の充実
- ③ 子供たちの主体性を引き出し、実社会で役立つ力を培う学習・体験の機会の充実
- ④ 学習意欲・学習習慣形成・学力向上の観点からの学習機会の充実

※土曜学習：教育委員会など学校以外の者が主体となり、希望者に対して学習等の機会を行うもの。

◆地域が多様な人材等の参画による土曜日の豊かな教育環境(土曜学習)の実現に向けた新たな方策

1. 多様な主体が土曜日の教育活動に参画する仕組みづくり

- ◆土曜日は、日頃参加が難しい現役の社会人も含め、地域人材や保護者、企業、NPO、民間教育事業者、大学生等の多様な人材の参画が可能
- ◆実社会の経験も踏まえたプログラムの展開に向け、多様な人材が教育活動に参画する仕組みづくりを推進

<p>①地域人材の参画促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○豊かな社会経験や指導力を持つ多様な人材の参画促進 	<p>③企業・団体等との連携協力促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校の要望と企業の取組のマッチング ○WLBの推進 ○企業内ボランティア登録制度やCSR・プロボノとして関わる仕組みの構築 ○企業人材に対する研修の充実 ○企業の退職者組織等との連携 	<p>④NPO・民間教育事業者との連携協力促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○NPOのノウハウ(人材や資金のコーディネート能力)の活用 ○学習塾、お稽古ごと、スポーツ、音楽、語学教室等の指導者の活用 	<p>⑤大学等の連携協力の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○研究者やポストドクター等の専門人材の活用 ○教育・福祉、スポーツ等の専攻の学生の積極的な参画促進 ○身近なロールモデルとして学生が持続的に参画できる仕組みづくり
---	---	--	---

2. 学校と地域・企業・大学等をつなぐコーディネート機能の充実

- ◆学校と地域をつなぐコーディネーターだけでなく、企業や大学等の多様な主体をつなぐコーディネーターの必要性
 - ◆コーディネーターの研修の機会やネットワーク組織等の充実
- 例えば、地域連携を担当する教員の配置や、「地域コーディネーター」、「企業コーディネーター」等をそれぞれ配置し、互いに連携し合う仕組みの構築。
- 学校や地域の関係者、企業、企業の退職者組織、NPO等多様な関係者が学び合う研修の機会充実等

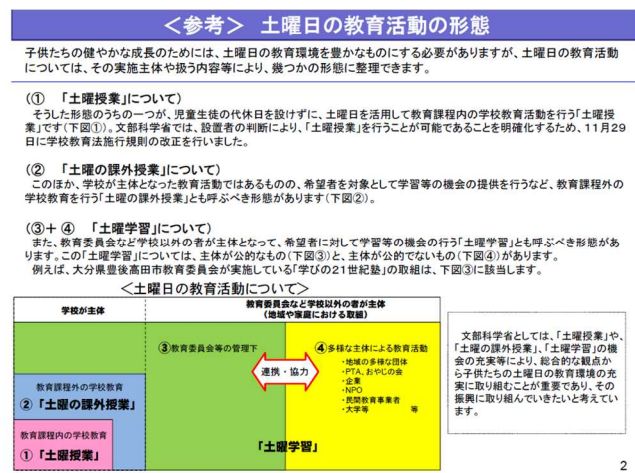
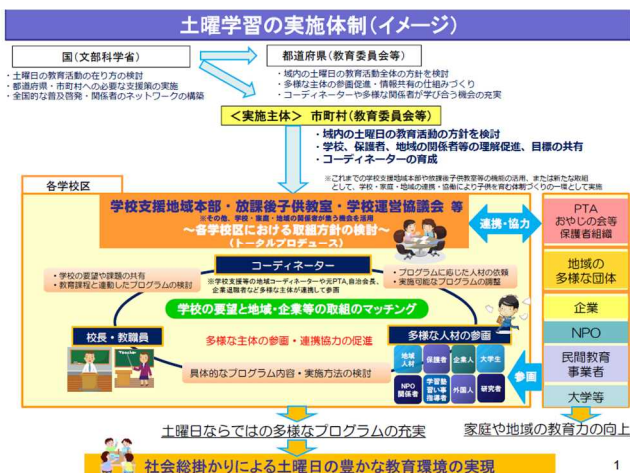
3. 「土曜日ならではの」多様なプログラムづくり

- ◆地域や企業等の協力を得て、「土曜日ならではの」活きた学習プログラムの展開
- ◆子供たちの主体性を重視しつつ、学校の教育活動との連動した体系的・継続的なプログラムづくり

<p>①実社会につながるプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ○社会で役立つ経験をするプログラム ○多様なロールモデルや「本物」に触れるプログラムの充実 	<p>②企業のリソースを活かしたプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校教育だけでは教えることが難しい実社会の経験を踏まえたプログラム ○環境教育、キャリア教育、国際理解等の企業の特性を活かしたプログラム 	<p>③学習意欲・習慣形成につながるプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ○就学前の子供たちが学ぶ楽しさに出会うプログラム ○振り返り学習や発展的な学習の充実 	<p>④「地域ならではの」プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域の目標を踏まえ「ふるさと教育」や「学力向上」などの地域の特性や課題に応じたプログラム ○多様性を重視したプログラム等
--	--	---	---

◆今後の土曜日の教育活動の持続可能な体制づくりにあたって

- 全国的好事例の蓄積・発信等を通じて、官民連携による普及啓発の推進
- 行政内部における首長部局と教育委員会が一層の連携を図り、効果的・効果的な総合的な支援策を講じていくことが必要
- 社会総括かりでの土曜日の豊かな教育環境の実現



◆◆ 教育環境の整備の実践事例 ◆◆

外国語教育のみならず、教育活動においては、「教化」（教える）だけでなく、それを支え、補完するものとして「感化」（感じさせる）を意識していくこともまた大切です。感化の取組としては、「教育環境」にその代表を見ることができ、外国語教育においては、子どもたちが学校生活を送る中で、自然と多様な言語や文化に触れることができるよう環境を整備しておくことが大切です。

以下では、第一に、杉並区立富士見丘中学校の「英語教室」を紹介します。また、本区において、小中一貫した外国語教育に先進的に取り組んだ杉並区立和泉小学校（平成 17—19 年度間）の「English World」を掲載します。

さらに、第二として、平成 24・25 年度 杉並区教育委員会 教育課題研究指定校「9年間の学びの連続による確かな学力の向上」として研究に取り組んだ杉並区立松ノ木小学校（同松ノ木中学校との協働）の実践を紹介します。「校内掲示」と「校内放送プログラム」の例です。

◆◆ 英語教室（杉並区立富士見丘中学校の実践例） ◆◆

第2 英語教室



第1 英語教室



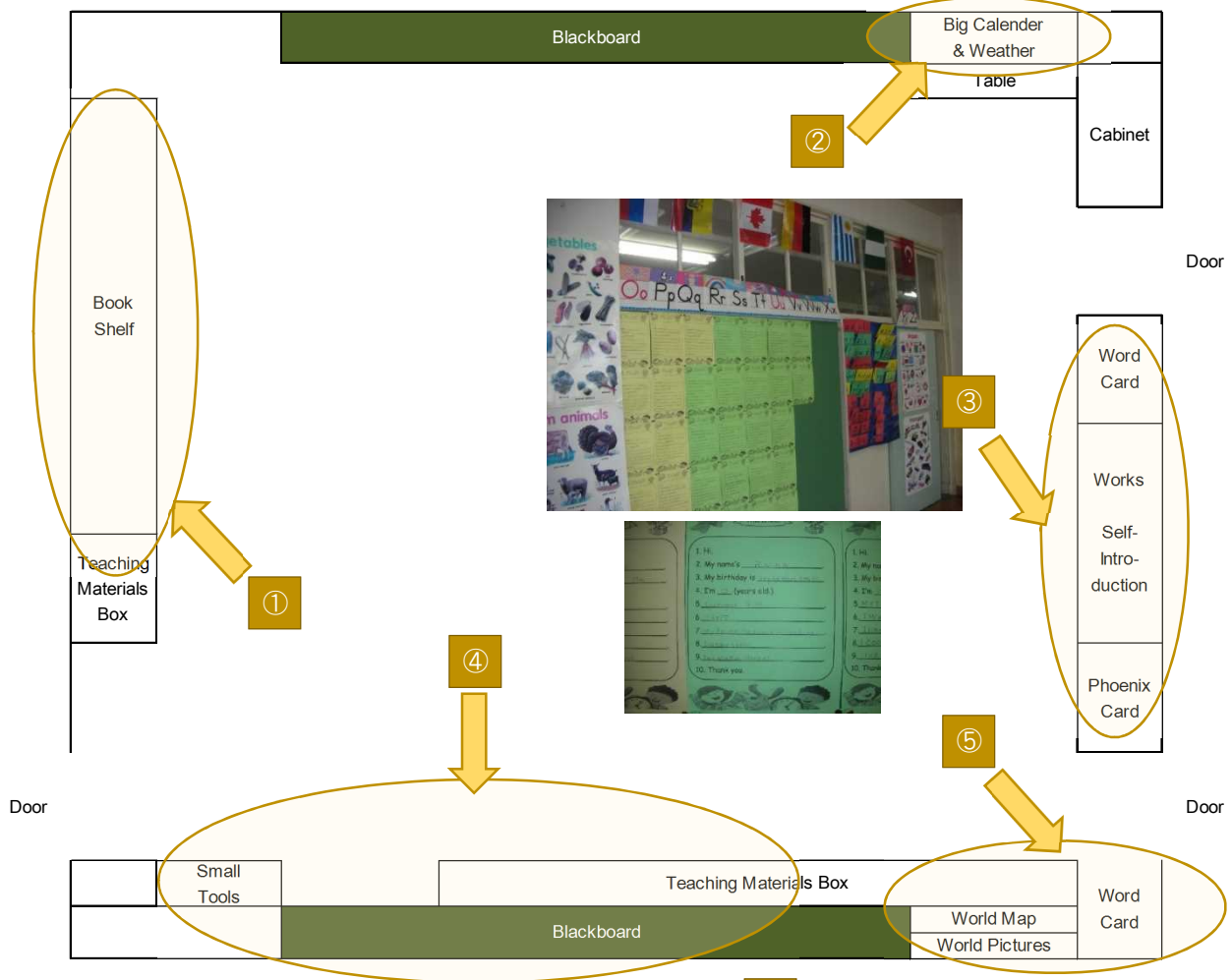
第2 英語教室



第1 英語教室



◆◆ English World (杉並区立和泉小学校の実践例) ◆◆



- I 小中一貫教育
理論編
- II 外国語教育
理論編
- III 外国語教育
実践編
全体・系統
- III 外国語教育
実践編
小学校
- III 外国語教育
実践編
接続・導入
- III 外国語教育
実践編
中学校
- IV 資料編

◆◇ 校内掲示 (杉並区立松ノ木小学校の実践例) ◇◇



I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

◆◇ 校内放送・放送委員会の週活動表（杉並区立松ノ木小学校の実践例） ◇◇

時間帯・時刻	曲目				
	月	火	水	木	金
朝 8:10～8:20	UNDER THE SEA／ディズニー				
中休み 10:25～10:45	BIBBIDI-BOBBIDI-BOO／ディズニー				
給食 12:45～13:00	クラシック 音楽	ラジオ まつのき	英語の歌の コーナー	ポケット 歌集	リクエスト曲
清掃 13:10～13:25	HEIGH-HO／ディズニー				
昼休み 13:25～13:40	ALL IN THE AFTERNOON／ディズニー				
下校 15:40～15:45	SOMEDAY MY PRINCE WILL COME／ディズニー				

※給食以外の放送は、CD『MY FIRST DISNEY Original Soundtrack Best』より選曲

◇ 水曜日の給食時に放送した曲目（一部）

- The Beatles.....Hey Jude／Yesterday／Let It Be／Hello Good Bye／Stand by Me
- The Carpenters.....Yesterday Once More／Sing／Top of the World
- The Rolling Stones...Ruby Tuesday／She's a Rainbow／Jumpin' Jack Flash
- ABBA.....Dancing Queen／Money Money Money／Gimme! Gimme! Gimme!
- Billy Joel.....Pianoman／Uptown Girl／Honesty
- Chicago.....Hard to Say, I'm Sorry／Saturday in the Park
- Eagles.....Hotel California／Take It Easy／Desperado
- Stevie Wonder.....Isn't She Lovely／Sur Duke／Superstition
- Journey.....Open Arms／Don't Stop Believin'
- Bon Jovi.....Someday I'll Be Saturday Night／Always／Never Say Good Bye
- Boz Scaggs.....We are all Alone
- Gilbert O'Sullivan...Alone Again (-Naturally)
- Olivia Newton John...Country Road
- Earth, Wind and Fire...September
- Jackson 5.....ABC
- Creedence Clearwater Revival...Have You Ever Seen the Rain

等

Songs & Chants と関連
させ、Authentic なもの
を使い、音声やリズム、韻を
楽しめるようなものを

出典

平成 24・25 年度 杉並区教育委員会 教育課題研究指定校「9 年間の学びの連続による確かな学力の向上」
研究紀要 Let's Enjoy English!! ～言語や文化の違いを認め、英語で楽しく伝え合う指導法の工夫

杉並区立松ノ木小学校

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

◆◇ 小学校外国語活動における他教科との関連を図った指導の実践事例 ◇◆

小学校外国語活動においては、指導計画の作成に当たり、「児童の興味・関心にあったものを指導内容や活動とし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。」との規定があります（外国語教育理論編 p.54, 55）。

このことを受け、平成 24・25 年度 杉並区教育委員会 教育課題研究指定校の杉並区立松ノ木小学校では、教育課程外の特設の時間に「松ノ木イングリッシュタイム」を位置付け、教科の内容や活動を取り入れた外国語活動を実践しています。この活動は、特に小学校第 1 学年から第 4 学年、教科としては、国語、社会、算数、生活、音楽、図画工作、家庭、体育との関連を図り展開されています。

以下では、本校の平成 24・25 年度研究紀要から、第 3 学年（図画工作科との関連）、第 4 学年（体育科との関連）の実践例を抜粋・要約、一部改編して紹介します。なお、本校では、その他にも、松ノ木中学校英語科教員との協力的指導、サマーイングリッシュスクール（夏季休業中、全学年、各学年に ALT が一人ずつ、1 週間にわたって 1 日 2 時間の外国語活動）などが実践されています。

◆◇ 小学校第 3 学年 松ノ木イングリッシュタイム（図画工作科との関連） ◇◆

1 単元名 Colorful Animal

2 単元の目標

- 好きな色で楽しみながら動物の絵を描くことを通じて、色や動物を表す言葉や歌に慣れ親しむ。

3 単元の評価規準

【関】コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】外国語への慣れ親しみ	【気】言語や文化に関する気付き
色の名前、動物を表す言葉やそれを含む英語の表現を使って、友達や ALT と積極的に関わろうとしている。	色の名前、動物を表す言葉やそれを含む表現に親んでいる。	日本語と英語で色や動物の名前の違いに気付いている。

4 本単元について

(1) 図画工作の内容や活動を取り入れた外国語活動

体験的な活動を通して、色鉛筆で塗りながら色の名前を何度も言葉に出すこと、聞くこと、その色を見ることで、色の英語名と、色そのものが体験的に結び付く。そして自分たちが描き、塗った動物の名前と色を慣れ親しんだ“Brown Bear”のリズムで歌うことで、色や動物の英語により慣れ親しめることを期待した。

(2) ティームティーチング（ALT との協働）

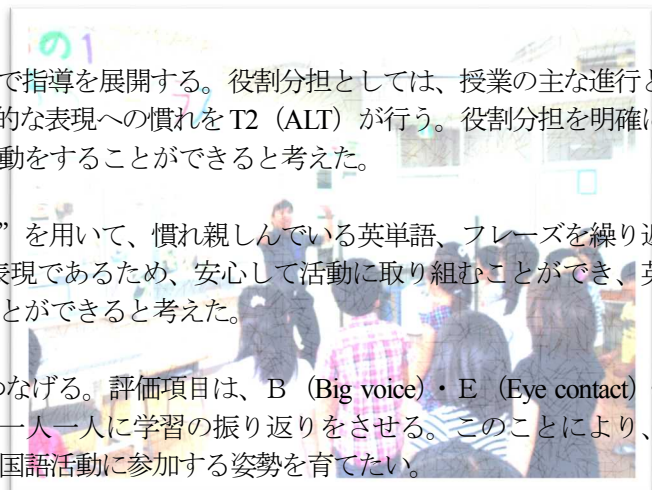
図画工作専科と ALT とチームティーチングで指導を展開する。役割分担としては、授業の主な進行と絵や歌の指導を T1（図画工作専科）、音声や基本的な表現への慣れを T2（ALT）が行う。役割分担を明確にすることで、授業が円滑に進み、テンポのよい活動をすることができると考えた。

(3) 学習過程の工夫

低学年から使用している英語絵本“Brown Bear”を用いて、慣れ親しんでいる英単語、フレーズを繰り返す（スパイラル）学習内容である。慣れている表現であるため、安心して活動に取り組むことができ、英語で表現することに対する達成感を味わわせることができると考えた。

(4) 評価シートの活用

評価シートを活用し、外国語活動への意欲につなげる。評価項目は、B（Big voice）・E（Eye contact）・S（Smile）・T（Try）とし、振り返りタイムで一人一人に学習の振り返りをさせる。このことにより、B・E・S・Tのルールを理解させ、積極的に外国語活動に参加する姿勢を育てたい。




6 本時の指導 ※5 指導計画は省略

(1) 本時のねらい

- ・動物の名前を表す英語の表現を通して、友達や ALT と積極的に関わろうとする。
- ・動物の名前を表す言葉に親しむ。
- ・色を表す言葉の英語と日本語の違いに気付く。

(2) 本時の展開 (2/2 時)

時間	児童の主な活動	・ T1 (HRT) の指導や留意点 ★学習活動に即した具体的な評価規準	・ T2 (ALT)
2分	1 Greetings ①挨拶をする。 ②始まりの歌を歌う。 ♪ “Hello Song”	・挨拶をする。 Let’s sing the “Hello Song.” ・歌の CD をかける。	・一緒に挨拶をしたり歌を歌ったりする。 Hello, everyone.
2分	2 Warm-up ①体を動かしながら、Brown Bear を歌う。	Let’s practice. Brown Bear. ・児童の前に立ち、一緒に体を動かして歌う。	Let’s practice. ・児童と一緒に体を動かして歌う。
18分	3 Activity1 ①色の確認をする。 ②色の塗り方を知る。 ③好きな色を一人ずつ聞きながら一本ずつ色鉛筆を受け取り、色を塗る。	What color is this? ・線画の動物を見せ、奇抜な配色例を見せる。濃淡を付けて色を塗る実演も行う。 Blue crow, Red crow, Yellow crow. Today, you will paint your picture with your favorite color. What color do you like? ・児童の好きな色 (1 色) で、前時に描いた動物の絵に色を塗らせる。(色鉛筆) ★【気】日本と英語の色を表す言葉の違いに気付いている。(言動・観察)	・発音のモデルを示す。 ・班の中に入り、児童の好きな色を聞きながら色鉛筆を渡す。
20分	4 Activity2 ①Brown Bear の歌とリズムに合わせて、自分の絵の紹介を行う。(班ごとに前に) (クラス全員で) What do you see? (指名された児童) I see a yellow fox looking at me. (自分の絵を紹介する) 順に紹介し、黒板に貼る。 ②クラス全員で全部の絵をリズムに合わせて歌う。 Children, children, what do you see? I see a red dog looking at me. I see a blue cat looking at me.	・発表会のルールを説明する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">B . . . Big voice E . . . Eye contact S . . . Smile T . . . Try</div> ・リズムをとって一緒に発音する。 ★【関】動物の名前を表す英語の表現を通して、友達や ALT と積極的に関わろうとしている。 ★【慣】動物の名前を表す言葉に親しんでいる。(言動・観察)	・各班の発表後に感想を言う。 
1分	5 Greetings ♪ “Good bye Song”	・歌の CD をかける。	・一緒に挨拶をする。
2分	6 振り返りタイム 本時の振り返りをする。	・振り返りをさせる。(B・E・S・T)	・感想を言う。 See you next time. Bye!

I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

◆◇ 小学校第4学年 松ノ木イングリッシュタイム（体育科との関連） ◇◆

1 単元名 Let's cook!

2 単元の見目

- ・ 題材に対するイメージをもち、その特徴を捉えて動きを工夫しながら踊ることを通じて、身近な食べ物を表す言葉やそれを含む表現に慣れる。

3 単元の評価規準

【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】 外国語への慣れ親しみ	【気】 言語や文化に関する気付き
身近な食べ物の名前を表す言葉やそれを 含む表現を使い、積極的に関わろうと している。	身近な食べ物の名前を表す言葉やそれ を含む表現に慣れている。	カタカナで表される食べ物の名前が日 本語の発音と異なることに気付いてい る。

4 本単元について

(1) 体育の内容や活動を取り入れた外国語活動

「体全体を大きく動かして英語に慣れ親しむこと」を単元のテーマにし、食材になりきり、主な特徴を捉えてグループで表現する運動と外国語活動「食べ物」内容を関連付ける活動を展開する。その際、表現運動の四つの工夫である「動き」(move)「リズム」(rhythm)「関わり」(collaboration)「空間」(space)を提示し、リズムやダンス、レアリア(実際に身の回りにあるもの)を使った即興表現を取り入れ、身近な食べ物やそれを含む表現に慣れることを期待した。

(2) ティームティーチング (ALT との協働)

担任と ALT とのティームティーチングで指導を展開する。役割分担としては、授業の主な進行と指導を T1 (HRT)、発音指導を T2 (ALT) が行う。役割分担を明確にすることで、授業が円滑に進み、テンポのよい活動を行うことができると思った。

担任 (HRT) と ALT の先生とティームティーチングで指導をする。役割分担としては、授業の主な進行と指導を T1 (HRT)、音声や基本的な表現への慣れを T2 (ALT) が行う。役割分担を明確にすることで、授業が円滑に進み、テンポの良い活動を行うことができると思った。

(3) 学習過程の工夫

第3学年と目標、単元をほぼ同じくし、スパイラルに指導する(繰り返す)ことによって英語に慣れ親しませるようにした。また、活動の際には、あくまで英語を使った活動として意識させた。ある程度慣れている表現であるため、英語を使えることに対する達成感を味わわせることができると思った。

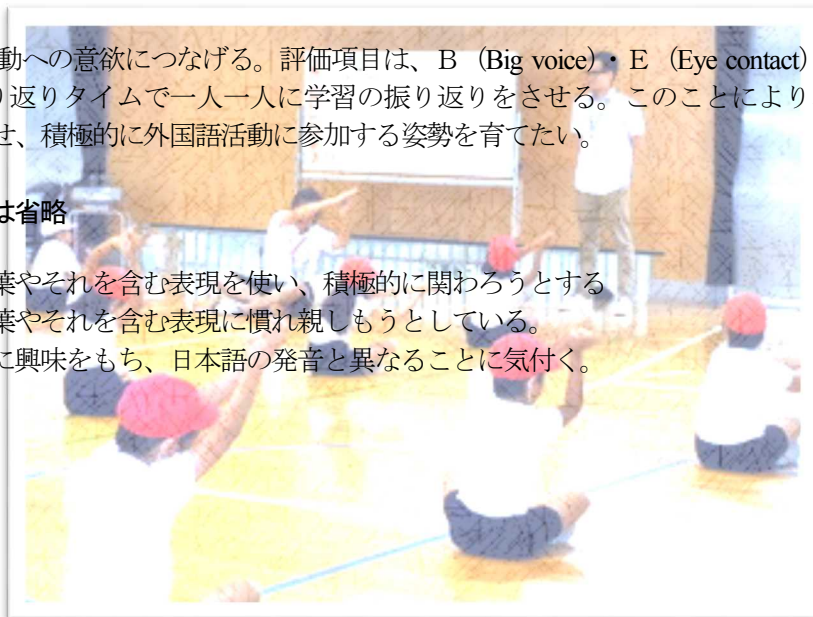
(4) 評価シートの活用

評価シートを活用し、外国語活動への意欲につなげる。評価項目は、B (Big voice)・E (Eye contact)・S (Smile)・T (Try) とし、振り返りタイムで一人一人に学習の振り返りをさせる。このことにより、B・E・S・Tのルールを理解させ、積極的に外国語活動に参加する姿勢を育てたい。

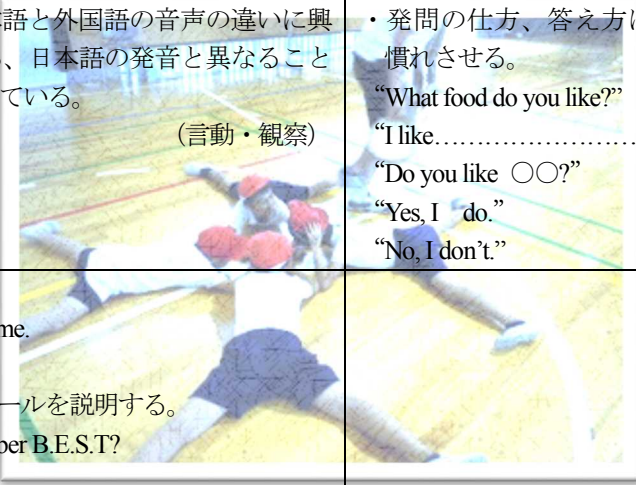
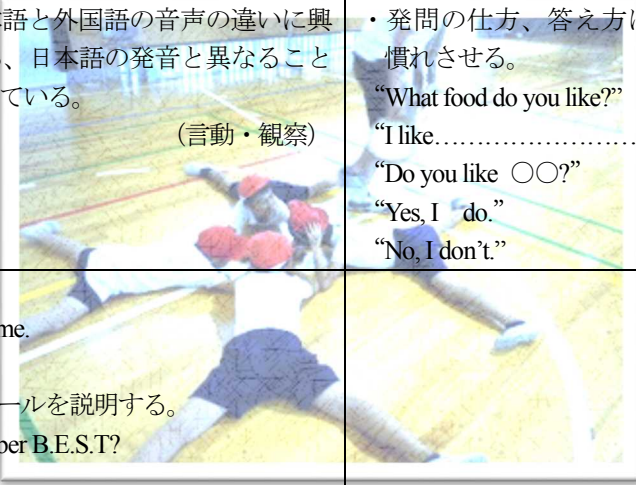
6 本時の指導 ※5 指導計画は省略

(1) 本時のねらい

- ・ 身近な食べ物の名前を表す言葉やそれを含む表現を使い、積極的に関わろうとする
- ・ 身近な食べ物の名前を表す言葉やそれを含む表現に慣れ親しもうとしている。
- ・ 日本語と外国語の音声の違いに興味をもち、日本語の発音と異なることに気付く。



(2) 本時の展開 (4/4 時)

時間	児童の主な活動	・ T1 (HRT) の指導や留意点 ★学習活動に即した具体的な評価規準	T2 (ALT)
5分	1 Greetings ①挨拶をする。 ②リズムダンスを踊る。 “Boogie Man”	・ 始まりの挨拶をする。 Let's start our English class. Let's dance! ・ 一緒に体を動かして踊る。	・ 一緒に挨拶をしたり踊ったりする。 Hello, everyone.
5分	2 Warm-up ①体を動かしながら、ほぐしながら“Hamburger Chants”を歌う。	It's Chants time. Please listen to the CD. Let's practice. Let's sing and do gestures. ・ 一緒に体を動かして歌う。	What's next? ・ 一緒に体を動かして歌う。
7分	3 Activity1 ①絵カードで表現を発音する。	・ 一緒に発音する。 ★【慣】身近な食べ物の名前を表す言葉やそれを含む表現に慣れている。 ★【気】日本語と外国語の音声の違いに興味をもち、日本語の発音と異なることに気付いている。  (言動・観察)	Let's practice. ・ 食べ物を表す言葉の発音に慣れさせる。 ・ 発問の仕方、答え方に慣れさせる。 “What food do you like?” “I like.....” “Do you like ○○?” “Yes, I do.” “No, I don't.”
25分	4 Activity2 ①発表会のルールを知る ②発表会をする。 グループごとに、音楽に合わせて、好きな食べ物を作る表現運動を発表する。 “What food do you like?” “I like.....” ③発表を見て、何を表現したかを当てる。 “Do you like ○○?” “Yes, I do.” “No, I don't.”	It's Cooking Time. Are you ready? ・ 発表会のルールを説明する。 Do you remember B.E.S.T? It's Show Time! Are you ready? CDを流す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">B . . . Big voice E . . . Eye contact S . . . Smile T . . . Try</div> ★【関】身近な食べ物の名前を表す言葉やそれを含む表現を使い、積極的に関わろうとしている。(言動・観察)	
1分	5 Greetings ①挨拶をする。 ②終わりの歌を歌う。	・ 挨拶をする。	・ 一緒に挨拶をしたり歌を歌ったりする。
2分	6 振り返りタイム 本時の振り返りをする。	・ 振り返りをさせる。(B・E・S・T)	・ 感想を言う。 See you next time. Bye!

I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

◆◆ 杉並区中学生海外留学事業（杉並区次世代育成基金活用事業） ◆◆

杉並区の教育においては、例えば学力を取り上げると、つまずきや学び残しのある児童・生徒への支援に重点を置きます。しかし、公教育が「全ての人・子ども」のためにある以上、より発展的な学習を望む児童・生徒に対しても、そうした機会を積極的に保障するよう尽力しています。中学生を対象とした補習支援事業において「発展的な学習」のクラスが設定されていることは、その代表例と言えます。

「杉並区中学生海外留学事業」（平成25年度スローガン：Set Sail and Take Wind of the Future! 出航！～未来の風をとらえて～）は、次代を担う子どもたちのためにあることはもちろん、上記のようなより発展的な学習の機会を保障する取組の一つとしても位置付けることができます。

以下では、「杉並区次世代育成基金」を活用して実施する本事業を、「すぎなみ教育報 No. 211（平成25年12月11日）」から一部転載しながら紹介します。



杉並区中学生海外留学



杉並区は、次世代を担う子どもたちのために「杉並区次世代育成基金」を創設し、杉並区と交流都市であるオーストラリア連邦ウィロビー市との海外留学事業を10月17～29日（12泊13日）に実施し、15名の中学生が参加しました。

本事業の目的には、海外における生活や現地の人々との交流などの直接体験を通して、「豊かな人間性を培い、国際感覚や英語によるコミュニケーション力など国際社会において必要な資質の形成を目指す。」ことと、「生徒自らが設定した課題の解決に向けた学習を行う。」などを掲げています。

Set Sail and Take Wind of the Future! 出航！～未来の風をとらえて～をスローガンに事前学習会を経て、出発しました。

現地での生活やオーストラリアの人々と交流することを通して、日本とオーストラリアの違いを実感し、また共通点を学びながら地球市民の一員であることを意識しました。



参加生徒の声



今回の留学の目的は、自分の将来の夢に近づくために、“国際的な視野を身につける”ことでした。また、留学を通して、自分が変わったと思えるようになりたいと考えていました。事前学習の中で、少しずつ成長している自分を実感し、留学に臨むことができました。現地では、英語を恐れずに使うこと、様々な決断、協力、感謝など、ひとつひとつの思いを大事にして行動するようになったと思います。（西宮中3年 内田万遊）

オーストラリアでは、講演や班行動、ホームステイなど多くの体験をし、現地の方々と触れ合いました。日本には学べない多くのことを学習できました。オーストラリアの良いところ、現地の生活を体験して学んだ日本の良いところを学校の友達に伝えていきたいです。（宮前中3年 小寺 純子）

学習プログラム



オーストラリア到着後、現地校での体験入学やマッコリー大学の見学をしました。
また、タロンガ動物園やシドニー水族館で現地固有の生態を学び、世界遺産であるブルーマウンテンズでは、オーストラリアの大自然を肌で感じてきました。



私は、セント・バイアス 10 世カレッジで2日間の体験授業を受けました。周りには日本語が無く、いつもの日常とは異なる、別の世界にいるようで不思議な感覚でした。この経験をこれからの生活に生かそうと思います。
(大宮中3年 吐田 虹作)



アボリジニ史跡博物館を見学して、アボリジニの人々が迎ってきた歴史を知りました。鮮やかな装飾品や民族楽器、狩猟や祭事に使う道具ブーメランなどが印象的でした。この文化を未来へ残して欲しいと思いました。
(井荻中3年 海谷 尊実)

ホームステイ



ウィロビー市の一般家庭に8日間お世話になり、オーストラリアの日常生活や文化に触れてきました。



ホストファミリーと過ごした時間は本当に楽しく、英語はもちろん、文化の違いなど多くの事を学んできました。ホームステイでは期待をはるかに超える良い経験ができました。これからも交流を続けていきたいです。
(和泉中3年 中川 綾乃)

◆◆ 現地での主な行程（平成 25 年度）◆◆

10/17	1 日目	出発式（区役所）・成田空港発
10/18	2 日目	シドニー市内巡り・日本総領事館での学習「領事講話」
10/19	3 日目	シドニー市内での「グループ別」課題研究
10/20	4 日目	学習会「現地で活躍する日本人からのメッセージ」 ウェルカムパーティー
10/21 ～ 10/25	5 日目 ～ 9 日目	《ウィロビー市作成学習プログラムによる学習活動》 ・現地校での授業参加 ・ユースセンターで現地生徒と交流 ・ダンスレッスン、アボリジニ史跡博物館見学と散策、オーストラリアのスポーツ体験 他
10/26	10 日目	フェアウェルパーティー
10/27	11 日目	水族館、動物園等での自然体験学習・研究活動
10/28	12 日目	ブルーマウンテンズで自然体験学習
10/29	13 日目	成田空港着、到着式（区役所）



I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ Basic Expressions & Aphorisms to Foster Sense of English ◆◆

Basic Expressions は、英語を英語のままに表現・理解する言語の認識枠組みを構築する (to foster sense of English) ことを目的に、Authentic な表現をまとめたものです。授業においては、Warm Up や Quick Response (My Project4) などを中心に活用することを前提にしています。

一方、Aphorisms は、Basic Expressions と同じ目的に資するとともに、個の生き方や共に生きることを支えるものとして名言・格言をまとめたものです。

多様なものを常日頃から収集するよう努め、実情に応じて活用できるようにしていくことが大切です。

■ Basic Expressions

1 96 Basic Expressions

1. Hi!	2. Bye!	49. Excuse me.	50. Yes?
3. How're you doing?	4. Pretty good.	51. Where's the telephone?	52. It's over there.
5. Where're you from?	6. I'm from Japan.	53. Ah-choo!	54. Bless you.
7. What's your name?	8. My name is Masami.	55. Pass me the tissue.	56. Here you go.
9. Ouch!	10. Are you all right?	57. What do you call this?	58. It's a durian.
11. Let me try.	12. This is fun.	59. How much is it?	60. It's 710 yen.
13. Can I go to the bathroom?	14. Sure.	61. Do you like sushi?	62. Yes, I do.
15. Can I have some water?	16. Go ahead.	63. How about you?	64. Me, too.
17. Are you ready?	18. Not yet.	65. Are you a good singer?	66. Yes, I am.
19. Hurry up.	20. Wait.	67. Are you tired?	68. No, I'm not.
21. Can we play a game?	22. That's a good idea.	69. Do you have any brothers?	70. No, I don't.
23. It's my turn.	24. That's not fair.	71. How old are you?	72. I'm 16 (sixteen).
25. This is for you.	26. Really?	73. What time is it?	74. It's 11:15 (eleven fifteen).
27. Thank you.	28. You're welcome.	75. I'm sorry.	76. That's okay.
29. Do you want some ice cream?	30. No, thank you.	77. Oops!	78. What's the matter?
31. I have to go.	32. See you.	79. I forgot my book.	80. You can use this one.
33. I'm finished.	34. That's great.	81. I'm hungry.	82. Have some cookies.
35. Can I have a sticker?	36. Of course.	83. I don't like this.	84. Don't worry.
37. ×■△○×××	38. What?	85. This is a frog.	86. Wow!
39. Do you speak English?	40. Yes, a little.	87. Can I see?	88. It's big.
41. Do you have a pen?	42. Just a minute.	89. What's your favorite food?	90. I like natto.
43. Is this okay?	44. I think so.	91. Why?	92. I don't know.
45. Can you play the piano?	46. Yes, I can.	93. Can you water-ski?	94. No, I can't.
47. Do you know kendama?	48. What is it?	95. Let's go.	96. I'll show you how.

2 Book List

○小学校第1学年から第4学年

- Oxford Reading Tree (Ginger Bread Man, Good Night Moon)
- Brown Bear, Brown Bear, What do you See? • From Head to Toe. • Who stole the cookies?
- Bears in the Night • My Pet • Peanut Butter and Jelly • Five Little Monkeys Jumping on the Bed
- THE EYE BOOK • The Little Red Hen • The Lady with the Alligator Purse • In a People House
- MR.BROWN CAN MOO! CAN YOU? • PLAY T-BALL • The Berenstain Bears and the Spooky Old Tree

○小学校第5学年及び第6学年

- Building Blocks Library (level 0~1) • The Very Hungry Caterpillar • Draw Me a Star
- The Secret Birthday Message • Shark in the Park • Ketchup on your Cornflakes?

○中学校

- Building Blocks Library (level 2) • Winnie the Witch • Mary Glasgow Magazines
- I'll teach my dog 100 words. • Building Blocks Library (level 3~9)

○その他

- クリスマス • Is That You, Santa? • Dream Snow
- ハロウィーン • Skeleton hiccups • GO AWAY, BIG GREEN MONSTER! • Peek-a-Boooo!
- 小学校国語科関連教材 • Swimmy • Flog and Toad Are Friends • The Letter

3 Tongue Twisters

- 1 I scream / You scream / We all scream for ice cream.
- 2 A big black bug bit a big black bear.
- 3 Rubber, Baby, Buggy, Bumper.
- 4 How much wood would a woodchuck chuck, If a woodchuck could chuck wood?
- 5 Peter Piper picked a peck of pickled peppers.
A peck of pickled peppers Peter piper picked.
If Peter Piper picked a peck of pickled peppers,
How many pickled peppers did Peter Piper pick?
- 6 She sells sea shells by the seashore.
The shells she sells are surely seashells.
So if she sells seashore shells,
I'm sure she sells seashore shells.
- 7 Betty Botter bought some butter.
"But," she said, "the butter's bitter.
If I put it in my batter,
It will make my batter bitter.
But a bit of better butter,
That would make my batter better."
So she bought a bit of butter.
Better than her bitter butter.
And she put it in her batter.
And the batter was not bitter.
So it was better Betty Botter
Bought a bit of better butter.

4 Mother Goose

- 1 Roses are red, Violets are blue, Sugar is sweet , So are you.
- 2 See you later, alligator. / In a while, crocodile.
- 3 Rain, rain, go away, Come again another day, Little Johnny wants to play.
Rain, rain, go to Spain, Never show your face again.
- 4 Humpty Dumpty sat on a wall, / Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses and all the king's men / Couldn't put Humpty together again.
- 5 ---This is the house that Jack built--- (つみあげうた)
This is the house that Jack built.
This is the malt
That lay in the house that Jack built.
This is the rat,
That ate the malt
That lay in the house that Jack built.

I
小中一貫教育
理論編II
外国語教育
理論編III
外国語教育
実践編
全体・系統III
外国語教育
実践編
小学校III
外国語教育
実践編
接続・導入III
外国語教育
実践編
中学校IV
資料編

This is the farmer sowing his corn,
 That kept the cock that crowed in the morn,
 That waked the priest all shaven and shorn,
 That married all tattered and torn,
 That kissed the maiden all forlorn,
 That milked the cow with the crumpled horn,
 That tossed the dog, That worried the cat,
 That killed the rat, That ate the malt
 That lay in the house that Jack built.

5 Proverbs

1 Time flies.	18 History repeats itself.
2 Time is money.	19 Strike while the iron is hot.
3 Love is blind.	20 All that glitters is not gold.
4 No pain, no gain.	21 All work and no play makes Jack a dull boy. / All play and no work makes Jack a mere toy.
5 Like father, like son.	
6 Money talks.	22 Practice makes perfect.
7 First come, first served.	23 When the cat's away, the mice will play.
8 No pain, no gain.	24 Let sleeping dogs lie.
9 So many men, so many minds.	25 No news is good news.
10 Kill two birds with a stone.	26 The die is cast.
11 Hunger is the best sauce.	27 Count your blessings.
12 Seeing is believing.	28 Health is better than wealth.
13 Rome was not built in a day.	29 There is no smoke without fire.
14 When in Rome, do as the Romans do.	30 An apple a day keeps the doctor away.
15 All roads lead to Rome.	31 Heaven helps those who help themselves.
16 A friend in need is a friend indeed.	32 Make hay while the sun shines.
17 Where there is a will, there is a way.	33 Every dog has his day.

6 Epigrams

- 1 Tomorrow is another day.----Gone with the Wind
- 2 Tomorrow is always fresh with no mistake in it yet.----Anne of Green Gables
- 3 Take care of all your memories. For you cannot relive them.----Bob Dylan
- 4 Boys, be ambitious.---- William Smith Clark
- 5 I think, therefore I am. (Cogito, ergo sum .)----Rene Descartes
- 6 There are three ages of man – young, old and ‘you’re looking wonderful’.-----Francis Cardinal Spellman
- 7 It is better create than no learn! Creating is the essence of life.-----Julius Caesar
- 8 Frailty, thy name is woman.-----William Shakespeare
- 9 To be, or not to be: that is the question.
- 10 A fool thinks himself to be wise, but a wise man knows himself to be a fool.
- 11 That which we can call a rose by any other name would smell as sweet.
- 12 Tomorrow, tomorrow, and tomorrow / creeps in this petty pace from day to day / To the last syllable of recorded time;

7 Speeches

1 I Have a Dream-----by Martin Luther King, Jr.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed, “We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal.”

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the State of Mississippi, a state sweltering with the heat of injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character. I have a dream today!

2 Final Speech of "The Great Dictator" -----by Charles Chaplin

You, the people have the power, the power to create machines, the power to create happiness. You, the people have the power to make this life free and beautiful, to make this life a wonderful adventure.

3 The Story of My Life-----by Helen Keller

One day, while I was playing with my new doll, Miss Sullivan put my big rag doll into my lap also, spelled "d-o-l-l" and tried to make me understand that "d-o-l-l" applied to both.

Earlier in the day we had had a tussle over the words "m-u-g" and "w-a-t-e-r."

Miss Sullivan had tried to impress it upon me that "m-u-g" is mug and that "w-a-t-e-r" is water, but I persisted in confounding the two .

In despair she had dropped the subject for the time, only to renew it at the first opportunity.

I became impatient at her repeated attempts and, seizing the new doll, I dashed it upon the floor.

I was keenly delighted when I felt the fragments of the broken doll at my feet.

Neither sorrow nor regret followed my passionate outburst.

I had not loved the doll.

In the still, dark world in which I lived there was no strong sentiment or tenderness.

I felt my teacher sweep the fragments to one side of the hearth, and I had a sense of satisfaction that cause of my discomfort was removed.

She brought me my hat, and I knew I was going out into the warm sunshine.

This thought, if a wordless sensation may be called a thought, made me hop and skip with pleasure.

We walked down the path to the well-house, attracted by the fragrance of the honeysuckle with which it was covered.

Someone was drawing water and my teacher placed my hand under the spout.

As the cool stream gushed over one hand she spelled into the other the word water, first slowly, then rapidly.

I stood still, my whole attention fixed upon the motions of her fingers.

Suddenly I felt a misty consciousness as of something forgotten---a thrill of returning thought; and somehow the mystery of language was revealed to me.

I knew then that "w-a-t-e-r" meant the wonderful cool something that was flowing over my hand.

That living word awakened my soul, gave it light, hope, joy, set it free!

There were barriers still, it is true, but barriers that in time be swept away.

I left the well-house eager to learn.

Everything had a name, and each name gave birth to a new thought.

As I returned to the house every object which I touched seemed to quiver with life.

That was because I saw everything with the strange, new sight that had come to me.

On entering the door I remembered the doll I had broken.

I felt my way to the hearth and picked up the pieces.

I tried vainly to put them together.

Then my eyes filled with tears; for I realized what I had done, and for the first time I felt repentance and sorrow.

4 At the inauguration in 1960- ---by John F. Kennedy

"Let the words go forth that the torch has been passed to a new generation of America."

"Ask not what your country can do for you; ask what you can do for your country."

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

■ Aphorisms

自らの道を拓く

1 自分の持ち味を見付け、自ら学び、考え、判断し、行動する力

We are born, so to speak, twice over; born into existence, and born into life.

「私たちはいわば二度生まれる。一度めは存在するために。二度めは生きるために。」(Rousseau)

All men by nature desire knowledge. 「すべての人間は、生まれつき知ることを欲する。」(Aristotle)

To be yourself in a world that is constantly trying to make you something else is the greatest accomplishment.

「絶えずあなたを何者かに変えようとする世界の中で、自分らしくあり続けること。それがもっとも素晴らしい偉業である。」(Emerson)

Do not go where the path may lead, go instead where there is no path and leave a trail.

「敷かれた道を進むより、道なきところに自ら道を築いて進め。」(Emerson)

Nature never deceives us; it is always we who deceive ourselves.

「自然は決してわれわれを欺かない。われわれ自身を欺くのは、つねにわれわれである。」(Rousseau)

Every artist was first an amateur. 「どんな芸術家も最初は素人だった。」(Emerson)

Genius is 1 percent inspiration and 99 percent perspiration. 「天才とは、1%のひらめきと99%の努力である。」

(Edison)

All truths are easy to understand once they are discovered; the point is to discover them.

「あらゆる真実は一度発見されれば理解するのは容易となる。肝心なのは真実を発見することだ。」(Galileo)

Doubt is the father of invention. 「懐疑は発明の父である。」(Galileo)

If I have ever made any valuable discoveries, it has been owing more to patient attention, than to any other talent.

「もし私が価値ある発見をしたのであれば、それは才能ではなく忍耐強く注意を払っていたことによるものだ。」(Newton)

I have not failed. I've just found 10,000 ways that won't work.

「失敗なんかしちゃいない。うまくいかない方法を一万通り見つけたただけだ。」(Edison)

When inspiration does not come to me, I go halfway to meet it.

「インスピレーションが湧かないときは、こちらから途中まで迎えに行く。」(Freud)

People who know little are usually great talkers, while men who know much say little.

「わずかなる知識しか持たぬ人間は多く語る。識者は多く黙っている。」(Rousseau)

I cannot remember the books I've read any more than the meals I have eaten; even so, they have made me.

「これまでに取った食事と同じで、これまでに読んだ書物をいちいち覚えていない。そうだとすると、その書物たちが今ある私をつくった。」(Emerson)

In the book of life, the answers are not in the back.

「人生という本には、うしろのほうに答えが書いてあるわけじゃない。」(Charles M. Schulz)

You can't get away from yourself by moving from one place to another.

「あちこち旅をしてみわっても、自分から逃げることはできない。」(Hemingway)

Finish each day and be done with it. You have done what you could.

「毎日毎日をきっぱりと終了せよ。あなたは全力を尽くしたのだから。」(Emerson)

2 変化の次代を捉え、たくましく生きる心と体の力

To live is not merely to breathe; it is to act;
it is to make use of our organs, senses, faculties – of all those parts of ourselves which give us the feeling of existence.

「生きるとは呼吸することではない。行動することだ。」

「それはわれわれの全器官を、感覚を、機能を利用すること、つまり、われわれに「生きている」という感覚を与える肉体のあらゆる部分を利用することである。」 (Rousseau)

Conscience is the voice of the soul; the passions are the voice of the body

「良心は精神の声であり、情熱は肉体の声である。」 (Rousseau)

The mind is like an iceberg, it floats with one-seventh of its bulk above water.

「心とは氷山のようなものだ。その大きさの7分の1を海面の上に出して漂う。」 (Freud)

How bold one gets when one is sure of being loved.

「愛されていると確信している人間はどれほど大胆になれることか。」 (Freud)

Out of your vulnerabilities will come your strength. 「あなたの強さは、あなたの弱さから生まれる。」 (Freud)

It is man alone who laughs; he alone suffers so deeply that he had to invent laughter

「人間のみがこの世で苦しんでいるので、笑いを発明せざるを得なかった。」 (Nietzsche)

A lie can travel half way around the world while the truth is putting on its shoes.

「真実が靴を履いている間に、嘘は世界を半周する。」 (Mark Twain)

A man should not strive to eliminate his complexes but to get into accord with them.

「人間は自分のコンプレックスを消し去ろうとするのではなく、それと調和を保つようにつとめるべきである。」 (Freud)

Man only likes to count his troubles; he doesn't calculate his happiness.

「人間というものは、不幸の方だけを並べ立てて幸福の方は数えようとしないものだ。」 (Dostoyevsky)

I walk slowly, but I never walk backward. 「私の歩みは遅いが、歩んだ道を引き返すことはない。」 (Lincoln)

You can't connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards. So you have to trust that the dots will somehow connect in your future

「未来を見て、点を結ぶことはできない。過去を振り返って点を結ぶだけだ。だから、いつかどうにかして点は結ばれると信じなければならない。」 (Steve Jobs)

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers.

「人生は時にレンガで頭を殴る。信じることを止めてはいけない。私は自分がしていることがたまたま好きだ。それが私を動かし続けている唯一のものだと強く信じている。たまたま好きなことを見つけなければならない。そしてそれは仕事についても愛する人についても真実だ。」 (Steve Jobs)

One day, in retrospect, the years of struggle will strike you as the most beautiful.

「いつの日か過去を振り返ったとき、苦心にすごした年月こそが最も美しいことに気づかされるだろう。」 (Freud)

You cannot escape the responsibility of tomorrow by evading it today.

「今日の責任から逃れることが出来たとしても、明日の責任からは逃れることは出来ない。」 (Lincoln)

共に生きる

3 豊かな感性をもち、感動を分かち合う力

Without music, life would be a mistake. 「音楽なしには生は誤謬となる。」 (Nietzsche)

The music that can deepest reach, and cure all ill, is cordial speech

「心の奥底に達してあらゆる病を癒せる音楽、それは温かい言葉だ。」 (Emerson)

Kindness is a language which the deaf can hear and the blind can see

「優しさ」とは、耳が聞こえない人でも聞くことができ、目が見えない人でも見ることができる言語なんだ。」 (Mark Twain)

I don't need a friend who changes when I change and who nods when I nod; my shadow does that much better.

「私が変わったときに変わり、私が頷いたときに頷くような友は必要ない。そんなものは、私の影がずっとうまくやる。」 (Plutarch)

The proper office of a friend is to side with you when you are in the wrong. Nearly anybody will side with you when you are in the right.

「正しい友人というものは、あなたが間違っているときに味方してくれる者のこと。正しいときには誰だって味方をしてくれるのだから。」 (Mark Twain)

Immature love says: 'I love you because I need you' 未熟な愛は言う：「あなたが必要。だからあなたを愛す」

Mature love says: 'I need you because I love you' 成熟した愛は言う：「あなたを愛している。だからあなたが必要」 (Fromm)

Life is short, but there is always time enough for courtesy.

「人生は短い。だが親切を行う時間はいつだって十分にある。」 (Emerson)

The best way to cheer yourself is to try to cheer someone else up.

「自分を励ます最上の方法。それは誰かを励まそうとすることである。」 (Mark Twain)

4 他者の存在を認め、多様な関係を結ぶ力

Accent is the soul of language; it gives to it both feeling and truth.

「アクセントは会話の生命である。アクセントは会話に感性と真実を与える。」 (Rousseau)

I have never met a man so ignorant that I couldn't learn something from him.

「学べるところが何も無いほどの愚か者に私は会ったことがない。」 (Galileo)

He who is most slow in making a promise is the most faithful in performance of it.

「気軽に約束しない人は、もっとも忠実にその約束を実行してくれる。」 (Rousseau)

The only way to have a friend is to be one.

「よき友人を得る唯一の方法は、まず自分が人のよき友人になることである。」 (Emerson)

Gratitude is a duty which ought to be paid, but which none have a right to expect.

「感謝は支払われるべき義務であるが、何人もそれを期待する権利はない。」 (Rousseau)

Anyone can become angry — that is easy. But to be angry with the right person, to the right degree, at the right time, for the right purpose, and in the right way — this is not easy.

「誰でも怒ることはできる、それは簡単なことだ。しかし、正しい人に、正しい程度に、正しい時に、正しい目的、正しい方法で怒ること、それは簡単ではない。」 (Aristotle)

Nearly all men can stand adversity, but if you want to test a man's character, give him power

「たいていの人には災難は乗り越えられる。本当に人を試したかったら、権力を与えてみることだ。」 (Lincoln)

To become truly great, one has to stand with people, not above them.

「真に偉大な人間になるためには、人々の上に立つのではなく、彼らと共に立たなければならない。」 (Montesquieu)

自らの道を拓き、共に生きる

5 持続可能な社会を目指し、次代を共に支えていく力

The fruits belong to all and the land belongs to no one.

「大地の実りは万人のものだが、大地は誰のものでもない。」(Rousseau)

Liberty is the right to do what the law permits. 「自由とは、法の許す限りにおいて行動する権利である。」

(Montesquieu)

Men build too many walls and not enough bridges.

「我々はあまりにたくさんの壁を立ててきたが、十分な橋はかけていない。」(Newton)

What experience and history teaches us is that people and governments have never learned anything from history, or acted on principles deduced from it.

「経験と歴史が私たちに教えることは、人間と政府は歴史から何も学ばず、すなわちそこから演繹した原則に従って行為することはないということだ。」(Hegel)

History repeats itself, first as tragedy, second as farce.

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として。」(Marx)

Civilization began the first time an angry person cast a word instead of a rock.

「文明というものは、怒った人間が石の代わりに言葉を投げつけたときに始まった。」(Freud)

To give the victory to the right, not bloody bullets, but peaceful ballots only, are necessary.

「正義を勝ち取るためには、血塗られた弾丸ではなく、平和的な投票こそが必要なのだ。」(Lincoln)

Beauty has no obvious use; nor is there any clear cultural necessity for it. Yet civilization could not do without it.

「美というものには具体的な使い道はなく、明確な文化的必要性も全くない。しかし、それなしでは文明は成り立たない。」(Freud)

Truth is stranger than fiction, but it is because Fiction is obliged to stick to possibilities; Truth isn't.

「真実は小説より奇なり。なぜなら、フィクションは可能性に固執せざるを得ない。だが真実はそうではないない。」(Mark Twain)

You have to work hard to get your thinking clean to make it simple. But it's worth it in the end because once you get there, you can move mountains

「シンプルであることは、複雑であることよりもむずかしいときがある。物事をシンプルにするためには、懸命に努力して思考を明瞭にしなければならないからだ。だが、それだけの価値はある。なぜなら、ひとたびそこに到達できれば、山をも動かせるからだ。」(Steve Jobs)

Let him who would move the world, first move himself 「天下を動かさんとするものは先ず自ら動くべし。」(Socrates)

Being the richest man in the cemetery doesn't matter to me ... Going to bed at night saying we've done something wonderful... that's what matters to me

「墓場で1番の金持ちになることは私には重要ではない。夜眠るとき、我々は素晴らしいことをしたと言えること、それが重要だ。」(Steve Jobs)

Simple can be harder than complex:

On life's vast ocean diversely we sail, Reason the card, but passion is the gale.

「皆がそれぞれに航海するこの人生の広漠とした大洋の中で。理性は羅針盤、情熱は疾風。」(Alexander Pope)

Everything that is done in this world is done by hope.

「この世でなされる全てのことは、希望の力によりなされる。」(Martin Luther)

We are born, so to speak, twice over; born into existence, and born into life.

「私たちはいわば二度生まれる。一度めは存在するために。二度めは生きるために。」(Rousseau)

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◇ 生き方を学ぶ教育活動の手引き（杉並区立済美教育センター、平成 25 年 3 月 31 日） ◇◇

平成25年度から全小・中学校全学年において、生活科・総合的な学習の時間を中核に、各教科等との関連の中で実施される「生き方を学ぶ教育活動」は、杉並区教育ビジョン2012に示された「目指す人間像」における「育みたい力」の育成のために設置される教育活動です。この活動は、社会と「かかわり」をもつ体験活動や貢献活動、調査研究活動（調べ学習）等を結び付けた探究的学習として実施します。学習の終末では、自らの生き方を考え、深めさせる学習活動を実施しています。

以下は、小中一貫教育の軸ともなる本教育活動の手引きです。



学習指導要領 「生きる力」の育成

「生き方を学ぶ教育活動」のねらい

- 地域を基盤とし、繰り返し地域とかかわり、つながる活動を通して、児童・生徒が、地域に親しみ、地域への愛着を高め、地域の実態や課題を探究的に学び、創造的、協同的に地域の課題の解決に取り組む態度を育む。
- 地域の中で生きる自分自身を振り返り、持続可能な社会の構築に向けて、これからの生活や自らの生き方について考えることのできる児童・生徒を育成する。

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

生き方を学ぶ教育活動

1 本活動の趣旨

- 生活科、総合的な学習の時間を中核に「生き方を学ぶ教育活動」を実施、義務教育9年間を通して一貫性のある教育（小中一貫教育）をより充実させ、杉並区教育ビジョン2012の目指す人間像や育みたい力に迫る。なお、区立小・中学校の連携校において、生活科・総合的な学習の時間の指導計画「生き方を学ぶ教育活動指導計画」を構成する。

2 本活動のねらい

- 地域を基盤とし、繰り返し地域とかわり、つながる活動を通して、児童・生徒が、地域に親しみ、地域への愛着を高め、地域の実態や課題を探究的に学び、創造的、協同的に地域の課題の解決に取り組む態度を育む。
- 地域の中で生きる自分自身を振り返り、持続可能な社会の構築に向けて、これからの生活や自らの生き方について考えることのできる児童・生徒を育成する。

3 教育課程上の位置付け

- 原則として、生活科・総合的な学習の時間に位置付けて実施する。

4 「生き方を学ぶ教育活動指導計画」作成上の留意点

- 生活科・総合的な学習の時間の全体計画、年間指導計画に適切に反映させ、意図的、計画的に実施する。
- 全ての学年において、地域を基盤とし、地域とかわり、つながる活動を実施する。
- 小学校第6学年、中学校第3学年においては、地域の課題を見付け、その課題解決に向けて取り組む社会貢献活動を実施する。
- 小学校での学習と中学校での学習が「系統性」「連続性」をもって結びつくよう、総合的な学習の時間において育む資質や能力、評価の観点等について、連携校内の小・中学校の教員が「協働」し、十分に協議して設定する。

小中一貫教育で力を高める総合的な学習の時間へ！

課題の改善

小(中)学校学習指導要領 第5(2)章
※総合的な学習の時間 第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

※()内は中学校学習指導要領における項目

《総合的な学習の時間の課題》

- 1 総合的な学習の時間の趣旨・理念が十分に達成されていない・学校種間の差がある。
- 2 小学校と中学校で同様の学習活動を行うなど、学校種間の取組の重複も見られる。
- 3 学校によっては、ねらいや子どもたちに身に付けさせたい力、評価の観点が明確になっていない状況がある。
- 4 総合的な学習の時間に補充教室のような専ら特定の教科の知識・技能の習得を図る教育が行われていたり、学校行事の準備などと混同された実践が行われていたりしている例が見られる。〈平成20年1月中央教育審議会答申

更なる充実



義務教育 9 年間を通して「自己の生き方」を考えることができるように、総合的な学習の時間を軸とし、各教科等で「系統性」「連続性」「協働」を踏まえて、具体化を図ります。

小学校 社会貢献活動例

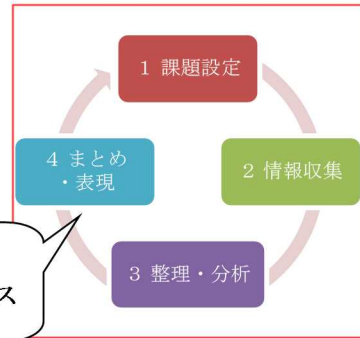
＜「自分たちの高円寺阿波おどり」杉並区立杉並第八小学校＞

1 課題設定

ゲストティーチャーからの期待（手紙）で課題設定



探究的な学習プロセス



2 情報収集

フィリップボードを使って町の人から情報収集



3 整理・分析

各教科等で既習の技能（グラフ等）を使って整理・分析



学区にある「東京高円寺阿波おどり」を学習対象にして第5学年から第6学年にかけて取り組みました。ゴミの問題に身近で切実な課題意識をもっていた子どもたちは、振興協会の方をゲストティーチャーとして招き、その熱い思いや生き様を感じて、自分たちでできることを考え出しました。実際に町に出て情報を収集する中で、当日の活動が具体化しました。振興協会へのプレゼンを経て、実際にボランティア活動をするに至りました。

4 まとめ・表現

阿波おどり当日、実際にゴミ袋を配ったり、ゴミ拾いをしたりして活動



中学校 社会貢献活動例

＜「共生社会に向けて」杉並区立中瀬中学校＞

1 課題設定

障害や福祉への興味・関心を高めるための調べ学習から課題の設定



3 整理・分析

交流体験後、振り返りシートに感想や気付いたことを記入し情報の整理・分析

2 情報収集

ボランティアや知的障害者の方々との交流活動を通じた情報収集



4 まとめ・表現

地域にある福祉施設との交流活動やボランティア活動の実施

スペシャルオリンピックスを題材にした活動は、障害者への理解を深め、多様性を尊重できる豊かな心を育み、誰もが共存できる地域社会に貢献する力を養うことを目的としています。「共生」をテーマとしたプログラム（ボランティアファミリー、アスリート本人の体験談、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長の講演、スポーツ、英会話、楽器、合唱での交流）を通して共生社会の大切さを学んだ成果を、地域にある福祉施設との交流や様々なボランティア活動につなげていきます。

【生き方を学ぶ教育活動指導計画】の作成上の留意点

平成 25 年度 生き方を学ぶ教育活動指導計画			
1 生き方を学ぶ教育活動で育む資質・能力（持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力）			
.			
.			
2 指導計画			
杉並区立 中学校			
学年	単元名	時数	主な学習活動
中学校 第 3 学年			
中学校 第 2 学年			
中学校 第 1 学年			
杉並区立 小学校		杉並区立 小学校	
学年	単元名	時数	主な学習活動
小学校 第 6 学年			
小学校 第 5 学年			
小学校 第 4 学年			
小学校 第 3 学年			
小学校 第 2 学年			
小学校 第 1 学年			
本連携校の「生き方を学ぶ教育活動」の特色			

【生き方を学ぶ教育活動で育む資質・能力】は、以下のことを踏まえて、小中連携校で協議の上、設定します。

- ・学習指導要領「総合的な学習の時間」の目標
- ・これまで各学校において総合的な学習の時間において育んできた力
- ・杉並区教育ビジョン 2012 における「育みたい力」
- ・E S D の視点に立った学習指導で重視する能力・態度

【主な学習活動】には、地域を基盤とした体験活動（小学校第 6 学年、中学校第 3 学年においては、社会貢献活動）を実施することが分かるように記述します。

【本連携校の「生き方を学ぶ教育活動」の特色】には、地域の教育資源（人的な支援、商店街や福祉施設等の活用など）や、小中一貫教育の顕著な取組等について記述します。

Q 「生き方を学ぶ教育活動」における杉並区小中一貫教育の取組視点「①系統性」「②連続性」「③協働」とは？

A1 教育目標・内容の「①系統性」
 「生き方を学ぶ教育活動」においては、それぞれの校種や学年で育む資質・能力を設定し、それらの間に明確な順序立てをしていくことで、教育目標・内容の「系統性」の理解が深まります。

A2 教育方法の「②連続性」
 例えば、小学校でも中学校でも「地域清掃活動」などの体験活動を実施する場合、教育目標・内容の系統性に応じた明確な順序立てをし、上の校種や学年の方がより質の高い活動が展開できるようにしていくことで、教育方法の「連続性」が確保されていきます。

A3 異校種の「③協働」
 教育の効果をより高めるために、小学校と中学校の「同じ」や「違い」を系統性・連続性を踏まえて理解し、異校種で「協働」する（各々を生かし合う）ことが求められます。

平成 25 年 3 月 31 日発行 【平成 24 年度生き方を学ぶ教育活動検討委員会】

杉並第三小学校	校長	横山 彰	和泉中学校	校長	由井 良昌
杉並第四小学校	副校長	今宮 直樹	井荻中学校	副校長	和田 栄治
杉並第八小学校	主幹教諭	畝尾 宏明	中瀬中学校	主幹教諭	山口 直美
事務局	済美教育センター	統括指導主事	飯塚 善行	指導主事	大島 晃

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

◆◇ 杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の設計 ◇◇

杉並区の「特定の課題に対する調査」(学力調査)は、平成16年度より実施しています。本区調査の特徴としては、①教科等指導の目標・内容の【系統性】及び方法の【連続性】に基づき、義務教育9年間のつながりのある調査内容(意識・実態調査については、言語活動や算数・数学的活動、コミュニケーション活動の教科等指導に関わる項目のみ)が企画され、②調査結果は、学習指導要領に準拠した評価として5段階に評定される。さらに、③教育行政(杉並区立済美教育センター)の学校に対する個別具体の支援として、学校長等からの要望に即した結果処理を行う。の三点にあると考えられます。

以下は、「平成25年度 杉並区特定の課題に対する調査、意識・実態調査報告書」より、調査の設計や結果の処理について解説した部分を一部加筆して掲載します。

1 調査の設計に係る基本的な考え方

(1) 調査の目的

ア(調査の内容)全ての子どもに、義務教育期間を通じ、よりよい人生を切り拓く基盤となる学力を確実に身に付けさせる観点から、杉並区立学校児童・生徒の①基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況及び、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力の育成状況並びに、③生活・学習状況、意識を把握する。

イ(結果の活用)調査結果は、教育に関する継続的な検証改善サイクルの一環として、①児童・生徒が自らの学習状況を振り返り、次の学習の糧とすること、②教師が自らの指導・評価の状況を省察し、特定の内容でのつまづき、学び残しの解消を重点とした指導・評価の改善を図ること、③教育行政が教育施策の成果と課題を検証し、学校の実情により応じた施策展開を図ること等に活用する。

(2) 調査の対象・方式、内容

ア 対象・方式

対象	方式
小学校第3・4学年児童、中学校第1学年生徒	悉皆
小学校第5・6学年児童、中学校第2・3学年生徒	各学校の希望利用

※ 特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級在籍の児童・生徒のうち、①下学年の内容などに代替して指導を受けている場合、②知的障がいである児童・生徒に対する教育を行う特別支援学校の教科の内容の指導を受けている場合は、対象としないことを原則とする。

イ 内容

名称	内容
特定の課題に対する調査 (教科等に関する調査)	国語科、算数・数学科、外国語 ・学習指導要領に準拠し、当該教科等における調査実施の前学年の目標・内容を出題趣旨とした設問から構成 ※外国語科は中学校第2・3学年のみ対象とする。 ※各教科の1単位時間に位置付け実施する。
意識・実態調査 (学習・生活についてのアンケート)	学習・生活についてのアンケート ・①「自らの道を拓く」基盤となる【自己効力感】、「共に生きる」基盤となる【相互承認の感度】等の自己意識や【生活習慣】等の生活実態及び、②【教科等の学習状況】【個に応じた指導の実現状況】等の学習実態の諸側面を観点とした質問内容から構成 ※学級活動の1単位時間に位置付け実施する。

(3) 学習指導要領に準拠した【系統性】【連続性】のある設問の設定

ア 出題趣旨の決定とレベルの設定

各設問について、当該教科等の義務教育9年間を通した目標・内容（事項）の【系統性】及び、その実現のための言語活動や算数・数学的活動等の方法の【連続性】並びに、学習評価の観点に基づいて出題の趣旨を決定し、下表のレベルを設定する。

基礎CとBとして設定される設問は100%の（準）通過率を目標とする、つまり、全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とする。応用AやSは、全児童・生徒により一層の育成を目指す「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力」を出題趣旨とする。

レベル		(準)通過の規準	全設問に占める割合
応用	応用S	「活用」できる状況で(準)通過	約 35%
	応用A	「十分定着」の状況で(準)通過	
基礎	基礎B	「おおむね定着」の状況で(準)通過	約 65%
	基礎C	「努力を要する」の状況で(準)通過	

※ 基礎Cは、前々学年の目標・内容が「おおむね定着」の状況で(準)通過を規準とする。

イ 出題内容及び回答形式の決定

出題趣旨とレベルを踏まえ、学習指導要領の目標・内容を実現するための学習指導によって自ずと（準）通過できるものとなるよう、出題の内容及び回答形式を決定する。

〔(設問の例) 中学校第2学年外国語科「聞いた話の要点をメモする」設問〕

- 出題趣旨：「D 書くこと ウ 聞いたことや読んだりしたことについてメモを取ったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。」【外国語理解の能力】
- 出題内容：(リスニング) これから、スピーチをします。その後、三つの質問をします。スピーチ文と質問は通して読み、もう1度繰り返して読みます。〔中略〕放送を聞きながら、「例」のようにメモ欄に必要なメモを英語で書きなさい。
- 回答形式：記述
- 学習指導要領を実現するための学習指導の展開例

学習活動	○指導事項 ☆指導上の留意点	学習活動に即した具体的な 評価規準【観点】(方法・材料)
3 空港でのアナウンスを聞き、搭乗に必要なことを英語でメモする。 〔以下はメモの視点例〕 ・ゲート ・搭乗の開始時刻 ・出発時刻 等	○聞いたことについて（英語で）メモを取ること。 ☆スペリングミスにこだわらず、文の流れに乗ってメモ取るように促す。	・うまく書けないところがあっても、聞いたことを英語でメモし続けようとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ・聞いたことを英語でメモできる。 【外国語理解の能力】 (メモ・観察)

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

2 調査結果に基づく学習状況の評定と結果の取扱い・活用

(1) 4段階の設問レベルに基づく5段階の学習状況の評定

調査結果は、平均正答率やその標準偏差、度数分布表、設問ごとの（準）通過率といった基本統計量を算出するとともに、下表の考え方に則り、調査実施の前学年の学習状況を、学習指導要領に準拠して「5段階（R1～R5）」に評価（評定）する（以下「5段階の学習状況の評定」若しくは「学力段階」という。）これは、「測定結果の10%程度は誤差」という紙面を用いた学力測定の一般的な性質（限界）を踏まえ、学力・学習状況を「段階評価」しようとする取組である。

段階評価の導入により、①義務教育段階の学習指導における最低達成水準を具体的な設問を通して一定程度明らかにできる、②調査結果（5段階の評定結果）と実際の学力・学習状況の対応関係に対するアカウントビリティが向上するといった効果が期待でき、③調査結果に基づく集団や個に応じた学習・指導の改善方策がより一層明確になる。

	応用 S の設問群を（おおむね）通過	R5
	応用 A の設問群を（おおむね）通過	R4
最低達成水準→	基礎 B の設問群を（おおむね）通過	R3
	基礎 C の設問群を（おおむね）通過	R2
	基礎 C の設問群を（おおむね）通過できない	R1

(2) 学習指導要領に準拠した各学習状況の評定の趣旨

各学習状況の評定の趣旨は、指導要録との対応と併せ、以下のとおりである。

「R3 おおむね定着が見られる」は、「最低達成水準」と言い換えることができる。上図にあるように、「R3」の評定には基礎 C と基礎 B の設問が用いられており、これらの設問は、学習指導要領に示される、義務教育9年間で全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」が出題趣旨となるからである。

状況	評定の趣旨	指導要録との対応	
R5	前学年までの学習内容で、発展的な力が身に付いている。 （十分満足できるものうち、特に程度が高い）	A+	A
R4	前学年までの学習内容で、十分定着が見られる。 （十分満足できる）	A	
R3	前学年までの学習内容で、おおむね定着が見られる。 （おおむね満足できる、最低達成水準）	B	B
R2	前学年までの学習内容で、特定の内容でつまづきがある。 （努力を要する）	C+	C
R1	前学年までの学習内容で、学び残しが多い。 （一層努力を要する）	C	

(3) 結果の取扱いと活用

ア 結果の取扱い

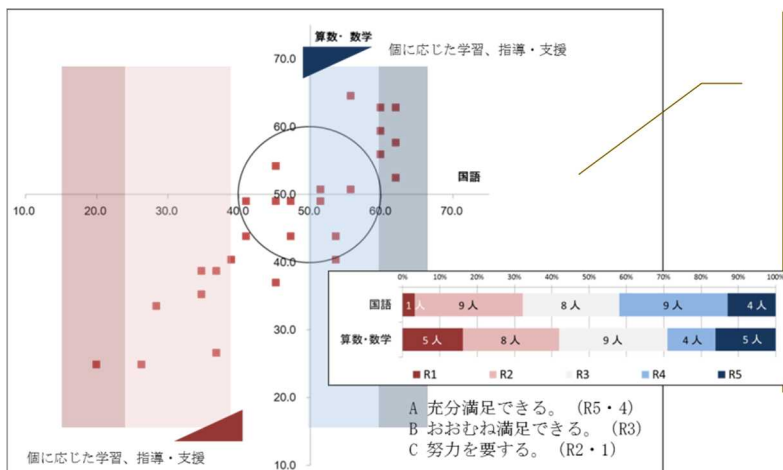
調査結果は、実施教科が限られていることや、児童・生徒の自己評価によるものであることなどから、あくまで、学力や学習状況の一部を紙面によって測定したものと捉える必要がある。例えば、連続得点上の1点（通過率や正答率の1%）の差は、必ずしも、実際の児童・生徒や学習集団の学力差を反映しているわけではない。

イ 結果の活用

結果の活用に当たっては、上述を踏まえ、調査の主たる役割を「学力や学習状況をおおまかな段階に分類する」ものと捉えたうえで、日常的な観点別学習状況評価の情報ははじめとし、多様な教育情報を積極的に用いることが重要である。

また、下図に例を示すように、5段階の学習状況と能力分布図（区平均・標準偏差による標準化得点の散布図）、さらに、意識・実態調査の結果を重ね合わせるなどして、結果を、個・集団に応じた学習・指導に役立てることが重要である。

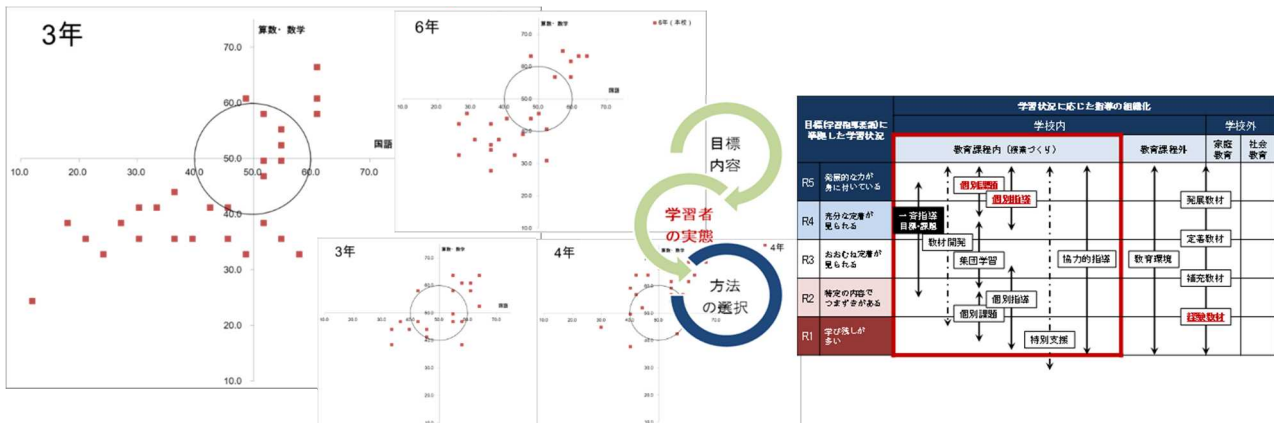
〔調査結果に基づいた5段階の学習状況と能力分布図を重ね合せた例〕



「個・集団に応じた授業改善」

- よりよい学習や指導の構想に当たっては、「個」と「集団」両者の実態に応じることが重要である。
- 左図は、集団と個の実態を直観的に把握する処理の工夫である。
- ねらいと実態に応じ、多様な手だてを組合せながら「全ての児童・生徒に」を目指していく。

〔多様な分布の例と全ての児童・生徒に対する手だての考え方〕



本調査の結果は、杉並区教育ビジョン2012推進計画の筆頭「目標Ⅰ 学びをつなげ、切れ目のない教育を進めます」の達成指標①にも設定されています（小中一貫教育理論編 p.14）。本区においては、学力に関わる施策を構想する際、本調査の結果に基づく学習指導要領に準拠した5段階の評定の状況から、全ての子どもに、各々の学習状況に応じてあまねく手だてが行きわたることを目指します。したがって、教育行政が主催する補習事業等においても、特定の内容でつまずきがある（R2）、学び残しが多い（R1）学習状況にある生徒はもちろん、より発展的な学習を必要とする（R4 や R5）の生徒についても、その機会を保障するようになっています。

また、各学校は、本調査結果等に基づき、学力向上推進計画を作成、教育課程に反映しています。次の頁には、その通知を掲載しています。

Ⅰ 小中一貫教育理論編
Ⅱ 外国語教育理論編
Ⅲ 外国語教育実践編 全体・系統
Ⅲ 外国語教育実践編 小学校
Ⅲ 外国語教育実践編 接続・導入
Ⅲ 外国語教育実践編 中学校
Ⅳ 資料編

25 杉教第 9137 号
平成 26 年 1 月 15 日

区立小・中学校長 宛

済美教育センター所長
田中 稔
(公印省略)

平成 26 年度 学力向上推進計画の作成、平成 26 年度教育課程への反映、
及び提出について（通知）

日頃より、杉並区教育委員会・済美教育センターの活動に御理解・支援を賜り、深謝申し上げます。
さて、杉並区教育委員会・済美教育センターでは、平成 16 年度から「学力調査、意識・実態調査」を
実施し、調査結果を活用した学習指導及びその改善を推進してまいりました。また、平成 23 年度から内
容・対象の転換に伴い名称を改めた「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果の一部は、杉並
区教育ビジョン 2012 推進計画にまとめられる目標の指標にも設定されているところです。
つきましては、掲題の件について、下記の要領から御対応くださいますよう、お願いいたします。

記

1 目的

- (1) 杉並区教育ビジョン 2012 推進計画の「目標Ⅰ 学びをつなげ、切れ目のない教育を進めます」の
実現に向け、①指導目標・内容の「系統性」の理解に基づく②指導と評価の方法の「連続性」の確保
を通じて③小・中学校及び教員の「協働」（各々を生かし合う協力的指導）を推進し、全ての子ども
に、自らの道を拓き、共に生きる、すなわち、よりよい人生を切り拓く基盤となる学力を確実に身に
付けさせること。
- (2) その際、日常的な学習評価の情報とともに、杉並区「特定の課題に対する調査」をはじめとする各
種学力調査の結果を活用して児童生徒一人一人の学習状況をきめ細かに把握し、特定の内容でのつま
ずき、学び残しの解消を重点として、学習指導の改善に努めること。
- (3) さらに、学習指導の改善に当たっては、同推進計画の「目標Ⅲ 個に応じた学び・成長をきめ細か
く支えます」を踏まえ、児童生徒一人一人の学習状況に応じた学びの機会の保障を重点として、指導
の組織化に努めること。

2 学力向上推進計画の作成、教育課程への反映及び提出

(1) 作成

ア 上記目的の達成に資するために、別紙の様式例に準拠し、平成 26 年度の「学力向上推進計画」
を作成する。

イ 様式例は、児童生徒の学習状況が「5段階」に分類されており、下記の内容を記入することがで
きるようになっている。

- ① 日常的な学習評価に基づく児童生徒の学習状況
- ② 各種学力調査結果に基づく児童生徒の学習状況
- ③ 学習状況に応じた取組

ウ イに記す学習状況の 5 段階は、学習指導要領（目標）に準拠した評価として、「5 発展的な力が
身に付いている」「4 十分定着が見られる」「3 おおむね定着が見られる」「2 特定の内容でつま
ずきがある」「1 学び残しが多い」とする。

- ※ 同様のものを既に作成している場合、それをもって代えることができる。ただし、①杉並区「特定の課題に対する調査」の対象教科である国語科、算数・数学科、外国語科それぞれについて、②上記イ及びウの内容が組み込まれていることを条件とする。
- ※ 国語科、算数・数学科、外国語科以外については、各校の任意とする。
- ※ 学力向上推進計画の名称は、各校において適切に定めるものとする。
- ※ 杉並区教育ビジョン推進計画 2012 の目標Ⅰに示す指標「区立中学校 3 年生の学習習熟度」は杉並区「特定の課題に対する調査」の結果に基づき、中学校第 3 学年生徒の第 2 学年までの学習状況を上記ウに記す 5 段階に評価し、段階 3 を義務教育段階における最低達成水準としたうえで段階 3～5 段階の合計割合をもって設定している。
- ※ 同推進計画の目標Ⅲに示す指標「個に応じた指導が充実していると感じる子どもの割合」は、杉並区「教育調査」のうち、児童・生徒対象の質問項目「授業では、自分の得意な部分を伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、先生が個別に教えてくれる時間がある」に対する肯定率（全回答に占める肯定的回答の割合）をもって設定している。

(2) 平成 26 年度 教育課程への反映

- ア 平成 26 年度 教育課程届の所定の欄（小学校は第 2 号の 2 様式、中学校は第 3 号の 2 様式、いずれも 2 指導の重点 (1) 各教科等 ア 各教科）に、作成した計画に基づき、特定の内容でのつまずき、学び残しの解消及び、児童生徒一人一人の学習状況に応じた学びの機会の保障を重点とした取組を記載することをもって、教育課程への反映とする。
- イ 反映期限は、各校の平成 26 年度 教育課程相談会日までとする。

(3) 提出

- ア 平成 26 年度 教育課程相談日において、作成した学力向上推進計画を 1 部プリントアウトのうえ持参し、担当指導主事からの教育課程届に記載した取組を主とした質疑に応答する。
- イ アの後、必要に応じて加除修正を行い、平成 26 年度教育課程届出日に、担当指導主事へ提出とする。

3 その他

- ・ 本通知 2 (1) に記す「学習状況の 5 段階」については、平成 23 年度から、各学校の要望に応じ、杉並区「特定の課題に対する調査」の結果に基づき参考となる情報を提供しております。
- ・ 学力向上推進計画の作成及び平成 26 年度 教育課程届への反映、並びに提出に係る具体的な手続きは、小学校については平成 26 年 1 月 14 日（火）、中学校については 1 月 16 日（木）に実施する平成 26 年度 教育課程届出説明会において御説明します。
- ・ 本通知は、SWITCH Portal のメールにより送信します。

【担当】教育指導係 教育課程担当(代表)

統括指導主事	出町 桜一郎
統括指導主事	平崎 一美
主任研究員（調査研究室長）	山口 裕也
指導主事	大島 晃
指導主事	遠山 典江
指導主事	杉浦 元一
指導主事	宮坂 葉月
指導主事	新井 晶子
教育課程担当	関戸 敏和
教育課程担当	延寿寺 晴行
電話	3 3 1 1 - 0 0 2 1

◆◆ Expectance for ESP Project in OECD Policy Forum (December 2013) ◆◆

2013年12月、杉並区教育委員会 井出 隆安 教育長は、ブラジル・リオデジャネイロで開催された OECD Policy Forum に出席されました。私たちが「学力」と呼ぶ「認知スキル (Cognitive Skills)」、そして「社会的・感情的スキル (Social and Emotional Skills)」又は「非認知スキル (Non-Cognitive Skills)」は、どのように個人の生や社会の進展に影響するのか。それが本フォーラムの主題です。

以下には、本会の配布資料の一部を掲載します。我が国の公教育史の構造を取り出しながら、ユニバーサリゼーション、よい社会や公教育の在り方を踏まえ、本プロジェクトへの期待を述べられています。

Policy Forum on 'Skills for Wellbeing and Social Progress'

Marina Palace Hotel, Rio de Janeiro, Brazil Wednesday, 4 December 2013

Roundtable discussion 2: Measurement challenges Policy-player's perspective 1

Expectance for CERI's ESP Project

Historical Structure and Its Meaning on Compulsory Education in Japan

IDE Takayama

Superintendent Suginami City Board of Education, Tokyo, Japan

Public education in Japan is now at a turning point. Both the society and economy have been shaken greatly by the political turmoil that occurred repeatedly in the 2000s. Public education could not escape from this influence.

Stating expectations for the ESP project, it is useful to review the historical structure and its meaning of compulsory education in Japan from the viewpoint of "skill". There are three points that are useful to examine in this issue.

■Points Will History Repeat Itself and Swing Back ?

✓ Points

Will History Repeat Itself and Swing Back ?

- Social and Emotional Skills (Non-Cognitive Skills), ICT Equipment and Teacher's Labor
- Trends Following, Swing-Back and Essential Theory
- Value of Public Education for Individuals and Society

Points are:

①social and emotional (non-cognitive) skills, ICT_[1] equipment and teacher's labor, ②trends following, swing-back_[2] and essential theory, and ③the value of public education for the individuals and society.

Among "Social and Emotional Skills, ICT Equipment and Teacher's Labor" there are two major trends in public education in Japan. The first trend is in developing social and emotional skills, and another is in using ICT equipment. These two are closely related.

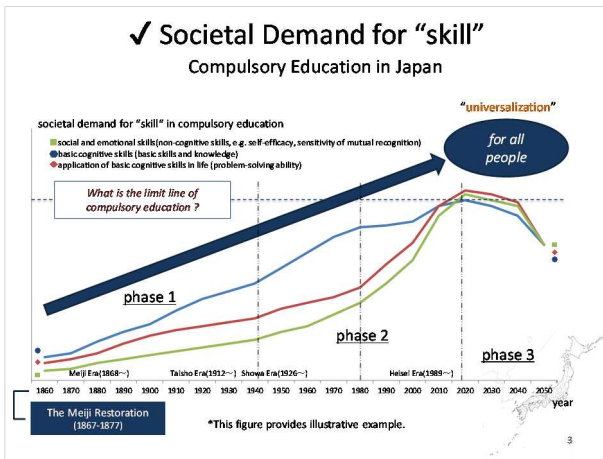
With relation to "Trends Following, Swing-Back and Essential Theory" the Subject of social and emotional skills and ICT equipment is not topical. Though the latter has entered a new phase of development due to the Internet and the spread of personal computers, the former is a subject that has been repeated in a different form time and again. To overcome trends following and swing-back for a better future of public education, we need an essential discussion that includes philosophy.

[1] "ICT" means Information and Communication Technology.

[2] "Swing-back" means some kinds of phenomenon occur repeatedly like the movement of a pendulum.

Finally “*The Value of Public Education for the Individuals and Society*” is a traditional argument for public education. This argument involves the principal of “conflict between ‘private’ and ‘public’.” Some insist that for the sake of happiness of individuals, we should allocate resources evenly to all people in order to acquire minimum life skills. Some people insist that for the sake of national development, we should allocate resources to a few elite in order to develop human capital. To discuss both as opposites has no meaning. Public education is for “private” (individuals) and “public” (nation), they are intertwined. The same thing can be said by replacing “individuals” with “a nation”, and “nation” with “other nations / the world”. If you consider education as a global responsibility the discussion can be expanded to a global scale. The conclusion here rests on the relation between “private” and “public” of education, and is closely related to social and emotional skills.

■ Societal Demand for “Skill” Compulsory Education in Japan



This figure provides societal demand for “skill” in compulsory education in Japan. This figure is a simplification of results from a larger set of quantitative and qualitative data.

Based on this information, in the last 20 years societal demand for compulsory education in Japan was increasing. However, due to the turmoil in politics and economy, the compulsory education system of Japan is reaching a crisis. From this point we will discuss phase 1 and 2-1, phase 2-2 and 3 followed by our main discussion. Perhaps what will follow is of help to the education of each county who can draw a similar comparison.

■ Phase1 1860–1940 Sprouting of Democracy / Industrial Modernization

■ Phase2-1 1940–1980 Centralized Governing System / Behavioral Economic Growth

✓ Phase1 1860-1940
Sprouting of Democracy / Industrial Modernization

■ Establishment of Basic Compulsory Education System
⇒ Open to all people “freedom”, Public education for realizing it

✓ Main Contents

- three-types of skills integrated, in a gradual subdivision

✓ Main Methods

- mass teaching
- by using textbook, blackboard and chalk

social demand for “skill” in compulsory education

■ Social and Economic Conditions (Keywords) (1860-1900)

- principle of equality of all people
- establishment of a constitution
- parliamentary government
- increasing of wellness and military, etc.

(1900-1940)

- party cabinet
- universal suffrage
- industry serving the nation, etc.

Source of background picture: <http://www.nid.go.jp/former/daiei/463/m.html> (around 1910)

Phase 1 and 2-1 summarizes the process of “behavioral economic growth” from the “industrial modernization”, and the “establishment of a centralized governing system” from the “sprouting of democracy”. From the viewpoint of “skill”, it can be said that the establishment of “mass teaching efficiently” with an emphasis on the acquisition of “basic knowledge”, lead to the realization of strong students who did well on standardized testing. This was a major accomplishment of this era.

I spoke of “swing-back” at the beginning. At the beginning of each of phase 1 and 2-1, the same phenomenon occurred. There was a greater emphasis on the development of basic cognitive skills (in particular knowledge), but in reaction to this there was also a higher demand for social and emotional skills (in particular moral). This can be seen in phase1 as a demand for a reformation of Japanese morality. This was a reaction to the influx of knowledge and skills coming from the West. In phase2-1, there was the

✓ Phase2-1 1940-1980
Centralized Governing System / Behavioral Economic Growth

■ Expansion of Equal Opportunity in Education
⇒ Realize “freedom” for all people associated with social development

✓ Main Contents

- basic cognitive skills, in particular knowledge

✓ Main Methods

- mass teaching and homogeneous grouping based on pupil / students’ abilities
- by using textbook, blackboard, chalk and audio-visual equipment

social demand for “skill” in compulsory education

■ Social and Economic Conditions (Keywords)

- industrial transformation / sophistication
- baby boom
- rural-urban shift of population
- graduates at all once / life-long employment
- universal middle class
- increase in nuclear family
- environment pollution
- prefectural disparities in various aspects, etc.

Source of background picture: <http://zabitenit.blog.so-net.ne.jp/2007-06-08> (around 1960)

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

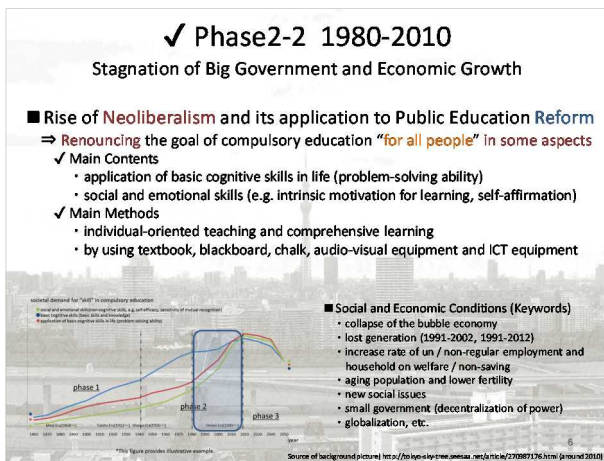
IV 資料編

establishment of “time of morality” in the curriculum while Japan aimed to be a world leader in science and technology. “Citizenship education”, “philosophy”, “ethics”, or “religious education” is perhaps common in other countries. Has a similar “swing-back” occurred in other cultures in times of change?

Teaching methodology in the initial of phase 1 and 2-1, also contributed to “swing-back”. These phenomena could be seen in, in phase1 when “How to respect the independence activities of pupils /students” from the research of Pestalozzi was enacted. In phase2-1, “experience curriculum” from the research of Dewey and the “new education movement” were examined, but “mass teaching” was not replaced by these methods. Efficiency is important in the process of expansion of minimum education to all citizens

In any case, Japan after passing through these phases was approaching society that could enjoy a “universal middle class”. The principle of equal opportunity in education became more realistic, Japanese society had evolved by interactions in politics, economy and public education. However this virtuous cycle, did not last so long.

Phase2-2 1980-2010 Stagnation of Big Government and Economic Growth



Phase2-2 is referred to as the “stagnation of big government and economic growth”.

After the 70s, the concept of “growth without end” and “ultimate objective to be achieved” is marked by the end by the advent of post-modernism in the 1990s this is most evident. This is often referred to as the “lost generation” (1991-2002 or 1991-2012). In order to overcome this problem the reform of various political, economic, and public educational systems began to be made in rapid succession. “Neoliberalism” or “individualization”, “diversification”, “flexibilization”, became the main ideas of reform as well as “selection and self-responsibility” and

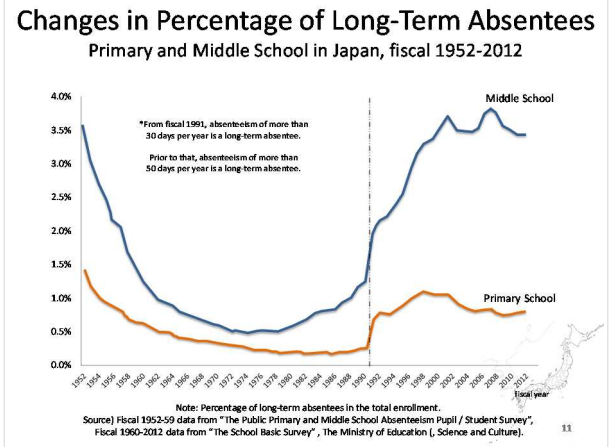
“free competition”.

In phase2-1 we can see the advent of “cram education” and the so called “competitive entrance examination”. This soon came to be derided as “knowledge overemphasis”. Swing-back occurred in phase2-2, educational contents selectiveness and reduction in hours of instruction became the trend. One can also see in this phase a “plateau” in the societal demand for basic cognitive skills. Developing of application of basic cognitive skills in life and socio-emotional skills involved interest being gathered. This was referred to as the “new concept of scholastic ability”. As a methodology, the “individual-oriented teaching” was emphasized by developing educational conditions (e.g. number of teachers per a pupil / student). And the “comprehensive learning” was shown a surge in reaction to the subdivision of knowledge and skills. This was the trend seen in the 80s and 90s, and is closely related to the changing conditions in the society and economy.

The “escape from poverty”, plays a major role as a (intrinsic) motivation for learning. However when social, economic and public education development guarantees a minimum standard living, the (superficial) value of compulsory education is reduced. Intrinsic motivation for learning and self-affirmation became the trend in phase2-2 this is the case. The security of minimum standard living conditions acts as a tool for diversification of way of life. However, diversification may not be realized if there is no foundation for society to rest upon. The foundation that we strive for is “approval (recognition) from others = society”, the lack of this is manifested in an increase of “truancy” and “social withdrawal”.

In order to more closely examine long-term absentee rates one can see the figure to the side. Refer to the attachment (Changes in Percentage of Long-Term Absentees, Primary and Secondary School in Japan, fiscal 1952-2012). The overall rate of

absenteeism is down from the 50's early, but has risen again from the mid-70s. It would be reasonable to assume that this down is brought about by the escape from poverty and disease associated with the development of society and economy, and this rise by the problems relating to intrinsic motivation for learning and self-affirmation. Of course, it is also possible this is related to the diversification of educational opportunities. There are many alternatives for educational opportunity recently. In such a situation, it was inevitable that educational contents and methods were individualized and diversified for “developing one’s personality”.



The so-called “PISA Shock” was caused by the results of the PISA 2000. Given the keyword “swing-back”, it is easy to imagine the results of PISA 2000, and the direction of public and compulsory education reforms in Japan. This concept is represented in the figure as a slide of phase2-2.

Summing up this phase, I want to add one more explanation. “Neoliberalism” that underpinned the various reforms during the period of stagnation has the riskiness of expanding disparity in various aspects. In particular the riskiness of “selection and self-responsibility” and “free competition” cannot be ignored. Make of that what you will, but it should be emphasized that there is a need to discuss positive and negative aspects of neoliberalism again.

■Phase3 2010– Social and Economic Globalization (in the future)

✓ Phase3 2010-
Social and Economic Globalization (in the future)

Return to the **Essence** of Compulsory Education in **Civil Society**
 ⇒ Clarifying the **guaranteed aim** of compulsory education “for all people”

✓ Main Contents

- harmonious development of three types skill
 - basic knowledge and skills, its application (problem-solving), social and emotional

✓ Main Methods

- appropriate use of various methods depending on each situation
 - individual / group learning, mass / flip teaching, project learning cooperative, etc.
 - textbook, blackboard, chalk, audio-visual equipment, ICT equipment, etc.

social demand for “ABT” in compulsory education

What is the **best** state of compulsory education?

■ Social and Economic Conditions (Keywords)

- globalization (all things, including person)
- problem of population and energy / resources
- centralized / decentralized?
- economy / environment?
- nation (world) / individuals (one nation)?
- for all / particular people?
- A-ism / B-ism?
- what is “good”? , etc.

The current condition in stagnation of social and economic in Japan is overshadowed by new opportunities presented to us by “globalization”. With globalization people, goods, money and information all transcend national borders. Policy debate is showing an upsurge with the introduction of new information and ideas. However, most discussions might be the dichotomy between *A* and *B*.

From this stage forward we can discuss a prediction for the future.

In the current phase, societal demands for compulsory education are increasing in response to globalization and intended to overcome the stagnation of society and economy. The aim is as well to develop globally-competitive human capital as a strategy for national interest. This is a requirement based on the interest in various aspects of politics and economy in order to maintain international competitiveness to “survive”. The decision to start foreign language (English) education from primary school in Japan would be a typical example. The expertise required of teachers becomes ever larger, and the limit in terms of both quality and quantity is quickly reached.

However, there is a need to discuss what is essential and fundamental for compulsory education. As long as we accept the premise that compulsory education is a part of civil society and for all people, then the discussion should be focused on how much and what kinds of skills should be guaranteed to all people. In order to develop target skills harmoniously, we should clarify what kinds of teaching and learning methods we should use in accordance with the conditions of pupils / students, educational materials and tools, time and space, etc. If this discussion remains focused on “survival in international competition” and we try to guarantee the people everything, the demands of teacher’s labor and compulsory education will continue to increase over time.

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

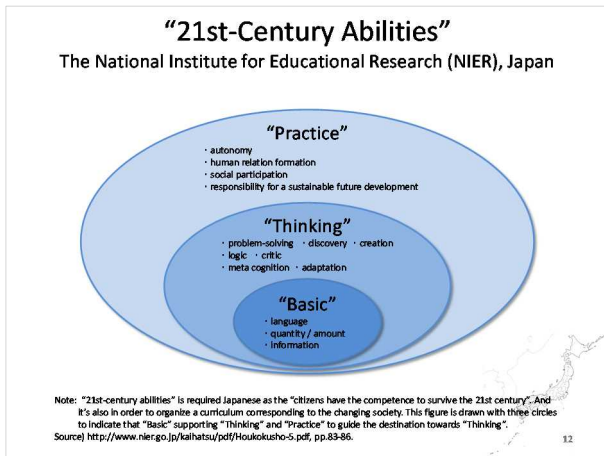
III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

In light of these circumstances, we can see the great potential for developing of social and emotional skills relating to using ICT equipment. These are two major trends of the education in Japan today. In the future the development of the Internet and the proliferation of the computer (in particular tablet type computer) allows for the acquisition of basic knowledge and skills in individualized and diversified ways (e.g. flipped learning). Excellent online learning contents are also a fast-evolving aspect of ICT. In schools, development of application of basic cognitive skills in life and socio-emotional skills may become two main contents as the main method of cooperative project learning.



In fact, in Japan, the latest revision to the “Government Course of Study” included discussions about the contents and methods for the development of cognitive, social and emotional skills. When you introduce one example, the National Institute for Educational Policy Research of Japan (NIER) is proposed that there be a “21st-century abilities”. Refer to the attachment (“21st-Century Abilities” The National Institute for Educational Policy Research (NIER), Japan). These abilities include, “practice”, “thinking” and “basic”. Through examining these issues over time we can see that there is the “swing-back” problem. We will agree to the proposal that the developing of “practice” is a main educational content, and “thinking” is at the core as well as

being careful to keep “basic” as an important factor.

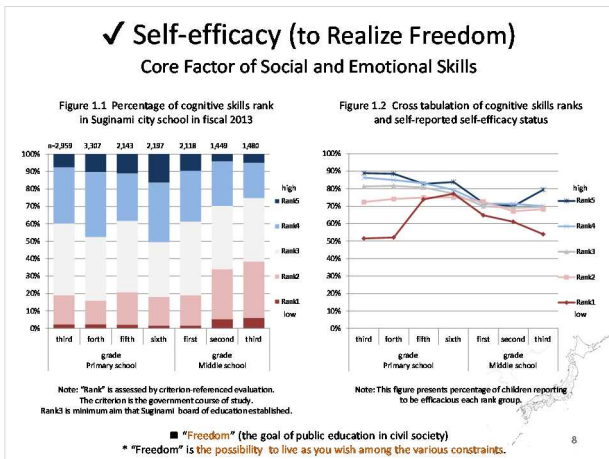
However, if we examine the history of, “practice” can be classified as the ability to multiply application of basic cognitive skills and socio-emotional skills. Cooperative project learning might become one of the main methods to develop “practice”. We expect in the future to see a phase when the acquisition of basic knowledge and skills become a problem due to the individual learning model. It will be at this time when the essential value of public education is called into question.

It is important to clarify what the formulation of a “good” society is as well as how public education contributes to this ideal. When the conditions of society, economy and education become clear by a survey, we will face the need to value what kind of conditions it is in light of a “criterion”. What is the criterion? It is the formulation of a “good” society. Only philosophy whose essence is axiology (value theory) can clarify that. In order to better utilize the valuable data obtained by the ESP project, philosophical discussion is essential. We can overcome the phase when compulsory education could not help shouldering a task to solute almost all social issues by the mutual complementation science and philosophy.

Gathering interest of developing social and emotional skills in relation to using ICT equipment will give us an important opportunity for thinking about a better future in relation to society and public education. The prediction that the societal demand will be reduced is based on the expectance for adequate role-sharing among public and compulsory education, family and local community in the figure as the slide of phase 3. It never means that the essential value of public and compulsory education will be reduced.

Below we can see published data from a survey of cognitive, social and emotional skills carried out in Suginami.

Self-efficacy (to Realize Freedom) Core Factor of Social and Emotional Skills

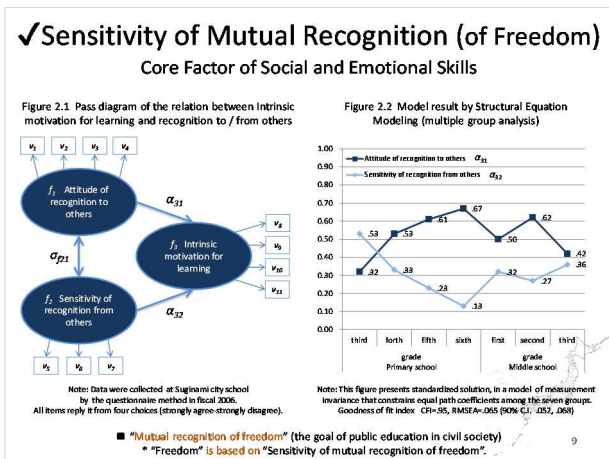


One of the core factors of social and emotional skills is "self-efficacy" (to realize freedom). Self-efficacy is belief, one's power to affect one's own life in a positive manner. Quality of life and future success can be greatly impacted by their self-efficacy belief. The concept of self-efficacy is directly connected to the fundamental principles of civil society.

One of the fundamental principles of civil society is "freedom". It is the possibility to live as you wish among the various constraints. It can be said that general self-efficacy is the belief to realize "freedom". When analyzing the relationship among the cognitive, social and emotional

factors we can see that self-efficacy is the key to many if not all.

Sensitivity of Mutual Recognition (of Freedom) Core Factor of Social and Emotional Skills



Another important factor is "mutual recognition" (of freedom). This can be surmised as "sensitivity of recognition (approval) from others" and "attitude of recognition (approval) to others". Whether there is any relationship among these factors and the "intrinsic motivation for learning" is an interesting area of study now.

"Mutual recognition of freedom" is another fundamental principle of civil society. Human beings desire to be able to carry on their lives in the manner that they choose. This drive for recognition has been the subject of wars and struggles that deprive of even lives in the past. History has shown us that hegemony = transcendent

power without "freedom" for all people has resulted in the resumption of war and struggle. Experiences of the past have shown us that as long as human beings have a desire for "freedom" and that "mutual recognition" of this value is given war and struggle can be avoided. In other words, by eliminating violence, and making promises with discussion, it must be recognized that in a "good" society everyone is "free".

Therefore, the goal and essential value of public education in civil society should be for the realization of "freedom" for all people and "mutual recognition of freedom" for society through giving opportunities for the acquisition of some "culture" (the term "bildung" in German). "Freedom" and "mutual recognition of freedom" are intertwined as well as the relationship between "private" and "public". In other words, developing "sensitivity of mutual recognition" is the condition for the realization of "freedom", and realizing "freedom" that is based on "sensitivity of mutual recognition" for all people is the condition for the realization of a "good" society.

"Self-efficacy" (to realize freedom) and "sensitivity of mutual recognition" (of freedom) are factors derived from the fundamental principles of civil society.

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

Conclusion To Realize Universalization for a Better future in relation to Society and

The conclusion is following:

- ① After the stagnation of society, politics and economy, the societal demand for compulsory education and the expertise required of teachers might become ever larger, and the limit in terms of both quality and quantity might be reached.
- ② Then, we have to return to the essence of compulsory education in civil society to overcome trends following, swing-back and the phase when compulsory education could not help shouldering a task to solute almost all social issues.
- ③ The goal and essential value of public education should be for the realization of “freedom” for all people and “mutual recognition of freedom” for society through giving opportunities for the acquisition of some “culture” (the term “bildung” in German). “Freedom” and “mutual recognition of freedom” are the fundamental principles of civil society. Therefore, it might be able to determine that “self-efficacy” (to realize freedom) and “sensitivity of mutual recognition” (of freedom) are two core factors of socio-emotional skills in civil society.

✓ Conclusion
To Realize **Universalization** for a Better Future
in relation to Society and Education

- **The Limit Line** of Compulsory Education Can be
 - historical structure and its meaning of compulsory education
 - social and economic conditions
 - societal demand for “skill” in compulsory education
- **Return to the Essence** of Compulsory Education
 - clarifying the guaranteed aim of compulsory education for all people
 - harmonious development of three types-skill
 - appropriate use of various methods depending on each situation
- **Core Factor** of Social and Emotional Skills in **Civil Society**
 - self-efficacy (to realize freedom)
 - sensitivity of mutual recognition (of freedom)
 - the goal of public education in civil society

10

Since the dawn of history, human beings have had only three types of social drive. They are “struggle”, “hegemony = transcendent power” and “mutual recognition”. It can be said that swing-back between struggle and hegemony = transcendent power has been repeated many times since the beginning of farming, pasturage and settlement—12,000 years ago. And still it is continuing. The struggle is caused by mutual distrust and scarcity of goods. The present conditions of the world involve what kind of struggle? Hegemony = transcendent power? Mutual recognition? In any case, could I see the world with no war and struggle in my life?

On one occasion, Christ said, “Love thy neighborhood as thy self”. Nietzsche said, “Wo man nicht mehr lieben kann, da soll man—vorübergehen!—” (Where one can no longer love, there should one—pass!—) on the other occasion. However, if we replace love, or if we go pass, we can recognize mutually as the fellow citizens. It is possible to live together without the depriving of physical and mental freedom, and the goods for its basis. This is one of the greatest inventions of modern human beings and contemporary society.

Once again, gathering interest in social and emotional skills, so as opposed to swing-back, gives us opportunity to realize a “good” relationship with other countries and the global community. I think that civil society is realizing in each nation. We should all hope that civil society can be found worldwide—the relationship between nations as well as citizens in one nation. I hope to be able to contribute to the betterment of member countries in the OECD through the ESP project. The term “universalization” is very useful in this discussion. At its essence it refers to the kind of society is we should all aspire to, everyone free as long as that freedom does not come at a cost to other people. Globalization should also follow this model. We are all free and equal members of the world if we consider the welfare of the world.

Thank you very much.



本論は、日本の公教育の歴史を、大きな構造としてくり振り返ってみると、例えば認知スキルと社会的・感情的スキル（非認知スキル）に関する議論が、幾重にも位相を変えて繰り返されてきたものであることが分かるとしています。また、現状の公教育・学校制度の中で、「国際競争に勝ち残る」という関心のみから議論を開始し、加速するグローバル化に対応するための資質や能力を全ての子どもに保障しようとするなら、教師の労働は限界線に達する可能性があるとも述べられています。

こうした現状認識に立ち、本論では、とりわけ昨今の「オープンエデュケーション」を支えている ICT への関心の高まり、また、本フォーラムの主題である社会的・感情的スキルへの関心の高まりを、「一過性のトレンド」また「歴史の揺り戻し」とするのではなく、今一度社会や公教育の本質を見直し、そのより質高い実現のための契機としていく必要があるということが主張されています。そして、その実現に際しては、決して1国にとどまらず、あらゆる境界を超えたユニバーサライゼーションの観点が必要不可欠であるとも述べられています。外国語教育理論編にある「グローバル化の正当性は、ユニバーサライゼーションによって基礎付けられる」との論は、ここに端を発するものです。

今、外国語教育のみならず、公教育は、大きな展開を迎えようとしています。様々な教育議論が、様々な機会を通じて盛り上がりを見せる中、私たちは、この議論を、どうしたら、建設的でよいものにしていくことができるのか。本論は、そのための底板となる思考の始発点・考え方を提案するものとして位置付けることができます。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編